

# 企画展 「氷壁」 を越えて

—— ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯 ——

堀  
田  
慎  
一  
郎

はじめに

一 石岡繁雄資料の名古屋大学への寄贈・寄託

二 準備作業の概略

三 展示内容とその特徴

(一) 全体の構成

(二) パネル展示―ストーリーパネルと写真・図表パネル―

(三) 物品・資料展示

(四) ハンズオン・映像資料

(五) 特別講演会

むすびにかえて

◇展示会場の写真

◇ストーリーパネル

◇写真・図表パネル一覧／写真・図表パネルの写真

◇物品・資料展示物等一覧／物品・資料展示物等の写真

◇ポスター／新聞記事

注

## はじめに

本展示記録は、企画展「氷壁」を越えて―ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯―<sup>①</sup>について、展示の内容、開催に至るまで経緯、展示の準備過程などを紹介するものである。

企画展「氷壁」を越えて<sup>②</sup>（以下、本企画展）は、第二八回名古屋大学博物館企画展として、二〇一三（平成二五）年十一月五日（火）から二〇一四年一月三〇日（木）を会期に、名古屋大学博物館三階展示室（約一五三<sup>③</sup>m<sup>2</sup>）において開催された（展示時間は一〇～一六時、日曜日・月曜日および二月二八日～一月四日は休館）。主催は、名古屋大学博物館と名古屋大学文学書資料室である。

これまで大学文学書資料室（以下、本室）は、まとまった会期を設定した特別展や企画展を、名古屋大学博物館との共催で四回開催してきた。<sup>④</sup>ただそのいずれも、展示内容の多くは名古屋大学（以下、本学）の歴史に関するものであった。これに対し、今回の企画展は、本学の歴史に関わる内容も含まれてはいたものの、それは主役ではないという点で、本室にとつては初めての経験であった。<sup>⑤</sup>

また、個人資料の寄贈や寄託を契機として企画展を開催したという点でいえば、渋谷元治の個人資料の寄贈後に開催された二〇〇二年の特別展「名帝大けふ誕生―初代総長渋谷元治とその時代」で経験があった（筆者自身は本室着任前で未経験だが）。しかし今回のように、寄贈・寄託個人資料の所有者であった石岡繁雄の遺族や関係者がきわめて深く関わりながら展示の準備が進められたことは、本室だけではなく、全国的にも珍しいケースではないかと思われる。

右のような特質を持つ企画展の内容や開催経緯、準備過程について記録しておくことは、大きな意義を持つであろう。

なお、本展示記録では、故人に対しては敬称を省略するものとする。また、本企画展は本室と名古屋大学博物館の共催によるが、本企画記録の文責は専ら筆者が負うものである。

## 一 石岡繁雄資料の名古屋大学への寄贈・寄託

本企画展開催のきっかけとなったのは、石岡繁雄の個人資料が本学に寄贈・寄託されたことであつた。

石岡繁雄（一九一八—二〇〇六）の詳しい経歴については、本展示記録にも掲載した年表パネルに譲るが、一九四〇（昭和一五）年に第八高等学校（本学旧教養部の前身）を、一九四二年に名古屋帝国大学工学部を卒業した、本学の卒業生である。さらに石岡は、一九五二年から一九六四年にかけて、本学の事務官として勤務していた、職員OBでもある。このように、石岡は本学と密接な関わりを持つ人物である。

そして石岡は、大きな社会問題となり、井上靖の人氣小説『氷壁』の素材ともなった、いわゆるナイロンザイル事件の当事者中の当事者である。ナイロンザイル事件の詳細については、本展示記録に後掲したパネルや写真等をご覧いただくが、石岡は事件の発端となった山岳転落事故で死亡した若山五朗の実兄であるとともに、その後二〇年にわたって展開された、若山五朗らの名誉を回復し、同時に登山者の生命を守るための運動の主役ともいえる人物であつた。



石岡は、記録を残すことに對しても大変熱心な人物であり、彼が二〇〇六（平成一八）年に亡くなった後には、膨大な個人資料が残されたのである。

本室が、この「石岡繁雄資料」（以下、石岡資料）に接したのは、二〇〇九年のことであつた。きっかけは、石岡繁雄の次女で、三重県鈴鹿市の石岡家宅で石岡資料を保存している「石岡あづみ氏から、石岡繁雄の名古屋帝国大学卒業記念に作られた抹茶茶碗の寄贈をうけたことであつた」<sup>3</sup>。二〇〇九年十二月、筆者と田淵宗孝事務補佐員が茶碗を受け取りに石岡家宅を訪問した際に、石岡繁雄の個人資料が膨大に保存されており、石岡あづみ氏や石岡繁雄の教え子の方々が、二〇〇七年一月頃からその整理作業を進めていることを知つた。

この時、すでに石岡氏から、石岡資料の中の本学に関する資料を、本室に寄贈する意思が示された。本室としては、ぜひ入手したい資料であることはやまやまだったが、筆者はあえて辞退した。その理由は、個人資料という一つのアーカイブズを保存するにあつては、史料群としてのまとまりを維持することが望ましいと考えたからである。石岡資料において圧倒的な比重を占めるのは、やはりナイロンザイル事件や山岳関係、石岡の発明品などに関する資料であるので、本室よりもふさわしい受け入れ機関が見つかるかもしれない。史料群をまとめて寄贈できる機関を少しさがしてみてもどうかと提案した。もちろん、本室が寄贈先の候補になりうることも伝えた。

その後、石岡氏は受け入れ先を模索しようであるが、最終的には、石岡資料を一括して本室へ寄贈したいとの意思表示があつた。これをうけて二〇一一年八月、筆者が再び石岡家宅を訪問し、石岡資料の内容や分量を具体的に検分するとともに、「石岡繁雄の志を伝える会」（石岡あづみ氏と石岡繁雄の教え子などからなる石岡資料の整理チーム）と整理や当面の保存措置の方法などについて打ち合わせをおこなつた。

本室でもあらためて検討の結果、石岡資料を受け入れることに決めた。ただ問題となつたのが、石岡の遺品や発

明品などの物品資料であった。本室が絶対に受け入れられないわけではないが、こうした資料の保存に最もふさわしいのはやはり博物館である。そこで二〇一一年十一月、名古屋大学博物館（以下、博物館）に石岡資料における物品類の受け入れを打診したところ、幸いにも承諾を得ることができた。史料群の一括保存という観点でも、同じ大学内であれば、本室と博物館が密接な連絡をとることができるので問題はないと判断した。

最終的には、文書資料は本室に寄託、物品資料は博物館に寄贈という形に決まった。本室では筆者、博物館では蛭薙観順准教授が、石岡資料受け入れの担当者となった。蛭薙准教授が二〇一二年三月に退職したのちは、西田佐知子准教授が引き継いだ。

実際に石岡資料が本学へ寄贈・寄託されたのは、二〇一二年八月のことである。この段階では一部未整理の資料が残っており、最終的に全ての資料の寄贈・寄託が完了したのは二〇一二年二月のことであった。こうして、本室には約一万二千点の資料が寄託、博物館には約五〇〇点の資料が寄贈されたのである。以下、本展示記録では、本室に寄託された資料を「石岡繁雄文書資料」、博物館に寄贈された資料を「石岡繁雄コレクション」とし、両者を合わせて石岡繁雄資料（石岡資料）と呼ぶこととする<sup>4</sup>。

寄贈・寄託の決定からやや時間がかったのは、石岡あづみ氏ら「石岡繁雄の志を伝える会」（以下、「伝える会」）による整理およびデジタル化作業の終了を待ったからである。こういった個人資料の場合、受け入れ機関に独自の整理方法があるので、整理も受け入れ機関に一任してもらう方法ももちろんある。また、受け入れ機関の方法にしたがって寄贈者に整理してもらうケースもありうるだろう。ただ今回の場合、寄贈・寄託が決まった段階で、すでに石岡あづみ氏ら独自の方法による整理がかなり進んでいた。さらに石岡氏らは、整理だけではなく、重要資料のほとんどをスキャニングする作業も合わせておこなっていた。これらの状況に鑑み、石岡氏らの方法を尊重する方

がよいと判断した。ただ、保存措置の方法についてのアドバイスを、中性紙製の封筒や文書箱の提供など、石岡氏の作業をサポートすることは積極的におこなった。

この石岡資料の本学への寄贈・寄託については、筆者の予想外の大きな反響があった。主要新聞は、石岡資料の本学への寄贈・寄託を大きく取り上げた。<sup>(5)</sup>とくに中日新聞は、二〇一二年八月一三日朝刊の一面にこのニュースを掲載するほどであった。<sup>(6)</sup>筆者は、石岡資料が本学の歴史資料としてのみならず、一般の歴史資料としても高い重要性を持つてゐることは分かっているつもりだったが、それでもなおこの報道ぶりには驚かざるをえなかった。ナインザイル事件や小説『氷壁』を、リアルタイムで見聞きした世代にとっては、きわめて強い関心を引かれる話題であったことを実感を持つて再認識した。

## 二 準備作業の概略

石岡繁雄資料が本学に寄贈・寄託された時、これを活用した企画展を開催するという話がすでにあった。アーカイブズ（文書館）が、こうした寄贈・寄託された個人資料による企画展を開催する時期については、大きく分けて三つの考え方があろう。

①寄贈・寄託後すぐに企画展を開催するやり方である。おそらく寄贈者・寄託者の多くはそれを望むだろう。その資料の受け入れを広く宣伝する効果もある。②保存措置を施し、資料目録を整備して、一般公開できる段階になつてから企画展を実施する方法である。アーカイブズ（文書館）の本分が資料の保存と公開である以上、その体制を

整えてから企画展を開催するというのは自然である。③資料の保存・公開体制が整い、さらに十分な研究をおこなううえで企画展をおこなうやり方である。本来ならこれが理想的かもしれないが、これは寄贈・寄託後、相当な時間がかかる可能性がある。また、史料を用いての研究がアーカイブズの主要な業務かどうかという問題もあろう。

石岡資料の第一次寄贈があつて約一カ月余り後の二〇一二年一〇月初旬、早くも博物館の西田佐知子准教授から筆者に対し、二〇一三年一月頃から翌年一月末くらいを会期に、石岡資料の展示会を大学文書資料室との共催でおこないたいとの意向が示された。約一年後ということ、前段落の②になるか否か微妙なところである。あるいはほとんど①の状態での展示会になるかもしれない。ただ、石岡資料の場合、すでに寄贈・寄託前に石岡氏による整理や保存措置が一通りおこなわれ、さらに重要資料のスキヤニングによるデジタル化も完了していた。そのため、どのような資料がどこにあるのかといったことは、すでにおおむね検索できる体制が整っていた。一年後までに、本室が資料一点ごとの目録を整えるなどの作業を終え、一般公開にこぎつけることは難しいかもしれないが、企画展をおこなうことは可能であると判断し、展示会の共催を承諾した。そしてまもなく、石岡資料の展示会を、二〇一三年一月五日から翌年一月三〇日を会期に、第二八回名古屋大学博物館企画展として、博物館と本室の共催でおこなうことが決まった。企画展の題目は、博物館側の案による『氷壁』を超えて「ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯」とされ、これがほぼそのまま実際の企画展の題目となった。<sup>(7)</sup>

こうして企画展の開催が決まったが、博物館も本室も他の業務に追われ、準備作業を進めることがなかなかできずに時が過ぎていった。また本室における一般公開に向けての業務も進めることができなかった。

本格的な準備作業に着手したのは、二〇一三年度に入ってからである。二〇一三年四月一日に、博物館から西田佐知子准教授、本室から筆者と松下佐知子事務補佐員が集まって会合し、打ち合わせをおこなった。その後も、

おおむね一カ月に一回くらいのペースでこのメンバーで会合を開いて全体に関わることを議論して決めていった。役割分担としては、ナイロンザイル事件以外の石岡繁雄の生涯に関わる第一コーナーと第三コーナーは西田准教授が、ナイロンザイル事件に関わる第二コーナーは筆者が、ハンズオン展示については松下事務補佐員が主に担当することになった。松下事務補佐員はこのほか、西田准教授や筆者の求めに応じて必要な石岡繁雄文書資料を本室の書庫から取り出す作業や、展示物の借用や展示許可に関することなど、さまざまな業務を担当した。

そして八月半ば過ぎあたりから、石岡あづみ氏ら「伝える会」の方々に、博物館や本室の展示案のチェックをお願いした。このチェックは詳細にわたるもので、ストーリーパネルだけではなく、写真パネルや展示品のキャプションにまで及んだ。それは単に誤りを指摘するだけではなく、さまざまな改善案を示していただいたり、こちらが気づかなかつた資料を紹介していただいたりしたことも少なくなかった。また河合義久氏には、パネル化する写真データの補正などをお引き受けいただいた。石岡氏ら「伝える会」のご協力がなければ、今回の展示を完成させることはできなかっただろう。

なお、二〇一三年一〇月一九日（土）に開催された第九回名古屋大学ホームカミングデイでは、本室が本企画展のプレ展示とチラシの配布をおこなった。

そして、一〇月二一日（月）から、西田准教授の指揮の下、会場の設営作業に入った。展示会場のコーディネートや展示全体の様式の調整は、西田准教授がおこなった。そのうえで、各コーナーの担当者（第一、第三コーナーは西田准教授、第二コーナーは筆者）が写真・図表パネルや展示物を配置していった。写真や図表をパネルにする作業は、博物館側がおこなうか業者（株式会社あるむ）に発注した。キャプションや説明文をプレートにする作業は、博物館側がおこなった。

石岡あづみ氏ら「伝える会」の方々には、展示の設営や撤収作業にも多大なるご協力をいただいた。また、「伝える会」のご提案をうけて、博物館の開館日には毎日二名ずつ、解説ボランティアとして会場に詰めていただいた。とくに石岡氏は、ほぼ全ての開館日にご来館いただいたとのことで、その熱意には頭が下がるばかりであった。

### 三 展示内容とその特徴

#### (一) 全体の構成

本企画展は、その題目である「氷壁」を越えて―ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯―からも分かるように、ナイロンザイル事件だけではなく、石岡繁雄の生涯全体もその大きなテーマとなっている。石岡繁雄資料は、ナイロンザイル事件関係資料だけではない、それ以前に石岡繁雄の人生を語る個人のアーカイブズであるから、これは当然ともいえる。

しかしそれだけではない。ナイロンザイル事件が多くの困難にもかかわらず、最終的には石岡の主張が社会一般に認められる形で結末をむかえたのは、石岡の個性による部分も大きい。石岡の人生や人となりを紹介することによって、石岡の個性がナイロンザイル事件に与えた影響とともに、事件が石岡の人生に与えた影響についても理解することができ、事件をより立体的に描くことができると考えた。このため本企画展は、第一コーナー「バックカスと山―石岡繁雄の前半生―」においてナイロンザイル事件発生までの石岡を描き、第二コーナー「ナイロンザイル事件―石岡と岩稜会、二〇年の闘い―」においてナイロンザイル事件を詳しく紹介したうえで、第三コーナー「氷

壁」を越えて「石岡がめざした安全学」において事件をのりこえた石岡がどのような後半生を送ったかを描くという構成になっている。

展示会場の様子は、本企画展後掲の写真をご覧いただきたい。なお会期中には、本学本部一号館玄関に設置されている博物館のサテライト展示ケースにも資料を展示した。

## (二) パネル展示―ストーリーパネルと写真・図表パネル―

今回のパネル展示については、本展示記録において、全てのストーリーパネルおよび写真・図表パネルをそのまま掲載した。また写真・図表パネルのキャプションや説明文等については、本展示記録の「写真・図表パネル一覧」に掲載した。

これまで筆者が本室で関わってきた、博物館と共催した三つの企画展における展示パネルは、項目名と写真・図表（およびそのキャプションや説明文）が一体となったものであった。一つの項目で一枚のパネルを構成し、そこに数枚の写真・図表（およびそのキャプション等）を掲載する方式である。この方式の利点は、写真の数や並べ方を早い段階から緻密に調整できることである。また、そのパネルやそのデータを保存しておけば、少ないスペースで容易に展示を再現することができる。

これに対し本企画展は、写真・図表は一点ずつ独立したパネルになっている。キャプション等も別になっており、パネルの傍にキャプション等のプレート<sup>①</sup>を貼っていく。この方式の利点は、展示にメリハリを作れること、写真・図表一点を大きくできること、後からでも大きな修正が容易なことである。そして項目ごとにテキストだけのパネルを設け、一項目あたり二〇〇字程度で大まかなストーリーを語るといった方式をとった。過去の三企画展でもテキ

ストだけのストーリーパネルを設置したが、コーナーごとのもので数は少なかった。しかし今回は、各コーナーの中の全ての項目ごとということで、三つのコーナーを合わせて実に三四枚のストーリーパネルが並んだ。

展示パネルのあり方については、過去の三企画展と今回と、どちらの方式が良いとは一概に言えないが、過去の三企画展で一体型パネルの方式に慣れていた筆者にとつては、やや違和感をともなった準備作業となった。ただ、今回の企画展にとつては、この方式が適切であつたと思う。過去の三企画展は、学校の歴史が主な内容であつただけに、展示の流れは比較的単純であつた。したがつて、ストーリーパネルは最小限度で足りた。しかし今回の場合、とくにナイロンザイル事件については、文章による具体的な説明が一定程度なければ、事件の全体像を理解してもらうことは難しいからである。また、会場での設営作業にかなりの日数を確保することができたため、写真・図表パネルの細かい配置や数を前々から細かく計算する必要がなかったこともある。

しかし、ストーリーパネルを多くすることは、ややもすれば文字ばかりが延々と並ぶ展示になり、入場者の観覧意欲をそぐ結果になる危険性がある。そこで、ストーリーパネルの文字数は、いくら詳しく書きたい事項があつても一定以上にはならないようにし、それらについては展示物のキャプションの方へ回すようにした（これにも限度はあるが）。また、事件のことはもちろん、登山を全く知らない人が読んでも理解できるように配慮するとともに、ストーリーパネルだけを読めば、ナイロンザイル事件や石岡の生涯の概略が分かるようにした。さらに、ストーリーパネルよりもさらに大まかな流れが一見して理解できるよう、コーナーごとに一枚ずつ年表パネルを設置した。

### (三) 物品・資料展示

展示ケースに入れるなどして展示した物品や資料についても、本展示記録において、全ての展示物の写真を掲載



するとともに、キャプションおよび説明文等については「物品・資料展示物等一覧」として掲載した。<sup>⑩</sup>

本企画展をおこなうにあたって、当初より大きな課題となっていたのが、ナイロンザイル事件に関する第二コーナーにおける物品・資料展示であった。第一、第三コーナーについては、石岡繁雄コレクションの中の石岡繁雄の遺品や発明品などがあるが、ナイロンザイル事件については、一目で観覧者の目を引くような、あるいはこの展示物を見たいから会場に足を運びたいと考えるような、目玉になる展示物を用意することが難しいと考えられた。もちろん、石岡繁雄文書資料の歴史的な重要性とその数は大変なものであるが、展示という観点からいえば、文字資料ばかりが並んでいては単調になるし、観覧者も疲れてしまうだろう。<sup>⑪</sup>

この問題については、長野県大町市の市立大町山岳博物館および静岡県長泉町の井上靖文学館から展示物を借用することができた。とくに大町山岳博物館は、事件の発端となった事故で死亡した若山五朗の遺体が身に着けていたナイロンザイルとアイゼンの実物や、ザイルが切断した現場に残されていたナイロンザイルの切片、石岡らが検証実験のために事故現場からとった岩角の石膏や実験に使った岩石など、貴重な物品資料を多く所蔵していることが知られていた。ただそれらは常設展示されているため、その借用は非常に困難かと思われた。ところが同館は、二〇一三年一月初旬から改修工事に入るためしばらく閉館するということで、幸運にも貴重な常設展示物などを借用することができた。これによって、第二コーナーに大きな目玉展示物ができたことは非常に大きかった。大町山岳博物館には、あらためて謝意を表したい。また、井上靖文学館からも、井上靖の直筆原稿（『水壁』の解題）を借用することができた。<sup>⑫</sup>

もともと、第二コーナーについては、それでも展示会場に文字資料が多いという印象を完全には払拭できなかったことは事実である。これはパネル展示を含めてのことだが、筆者はできるだけ枝葉を削ってシンプルな展示を心

がけたいという考えを持ちつつも、その一方で石岡氏ら関係者の、この企画展に少しでも多くの展示物や事項を盛り込んでほしいという願いも理解でき、その調整に苦心した。結果的には、博物館が持っている展示ケースを目一杯使うなどして、かなり展示物の数が多くなったが、本企画展が石岡資料の紹介という意味合いを持っていることもあり、これでよかったと考えている。

#### (四) ハンズオン・映像資料

ハンズオン・映像資料についても、本展示記録において写真を掲載するとともに、キャプションおよび説明文等を「物品・資料展示物等一覧」に掲載した。

本企画展は、多くのハンズオン資料があつたことも特徴の一つである。これは前項でも述べたが、第二コーナーは文書資料の展示が多く単調になりがちなので、その対策としての、ハンズオン展示の企画は重要であつた。

その意味で、最もインパクトがあり、低年齢層を中心に人気があつたのが、「安全性実験を再現」と題したアトラクションである。このアトラクションは、紙粘土に固定した石に人工繊維製の紐をあてて、観覧者に切ることを試みってもらう装置である（ケガを防ぐため、周囲をアクリル板でカバーした）。石と紐を、若山五朗が遭難した岩角と体を結んでいたナイロンザイルに見立てた。そして装置は、石の角が鋭利なもの丸みが付いているものの二種類を用意した。もちろん、角が鋭い方のみが切れる結果になる。これらの装置は、実際の事故や石岡繁雄の検証実験に比べれば原理をかなり単純化しているが、岩角の鋭さによっていかにナイロンザイルの強度に差が出るのかを体感してもらうことには成功したと思う。

また、現在と事件当時の登山のあり方の違いを理解してもらうためのハンズオン展示を二つおこなった。一つは、

登山用具の進歩（軽量化）を体感できるよう、一泊登山の荷物と同じ重さにしたリュックサックを、現在のものと事件当時のものの二つを用意し、観覧者に持ち上げて比較してもらおうという企画である。もう一つは、登山雑誌と登山の解説本を、それぞれ現在と事件当時のものを並べて展示した。

さらに、事件当時にナイロンザイルが新製品として期待されていたことを理解してもらえよう、ナイロンザイルと麻ザイルを並べて観覧者にさわらせるという展示企画もおこなった。また、石岡繁雄の事件解決にかける熱意を実感できるよう、実際に検証実験に使って切れた多くのナイロンザイルを山盛りにして展示した（観覧者も触れることができる）。

そのほか、展示に盛り込むことができなかった資料や写真のコピーや活字化したものを、関連する展示の傍に置いた。これも効果的であったが、少し数が多く、ただですら文字資料の展示の連続になりがちな展示会場が、やや雑然としてしまったように感じた。

映像資料としては、河合義久氏制作の石岡繁雄の生涯やナイロンザイル事件に関する二つのDVDを、会場内に二つの大きなモニターを設置して上映した（それぞれの場所に椅子を設置）。また、後述の石原國利氏による特別講演会の様子を、会場内に小さなモニターを置いて上映した。ただ、いずれも上映時間が一時間前後と、ただですら展示内容の密度が非常に濃いため一通り観て歩くには相当の時間がかかる本企画展会場での上映物としては、やや長すぎたようにも感じた。

#### （五）特別講演会

本企画展では関連企画として、その会期中に石原國利氏「ナイロンザイル事件発生のおきざつ」（二〇一三年

一月二二日（金）一三時半〜、相田武男氏「厳しさと優しき、愉快さが同居していた石岡さん」（二〇一三年  
一月二三日）（金）一三時半〜、三矢保永氏「ながら山登りの楽しみ方―雲を読む、風を読む、光を読む」（二〇一四  
年一月一七日）（金）一三時半〜という三回の特別講演会を博物館が開催した。

一回目の講演者である石原國利氏は、事件の発端となった転落事故を、死亡した若山五朗のザイルパートナーとして目の当たりにし、その後の事件にも石岡繁雄とともに臨んだ人物である。そのような人物に詳しく当時の状況を語っていただいたこの講演こそが、ある意味で本企画展の最もインパクトのある目玉企画であったといえるかもしれない。多くの聴講者に来ていただけだろうとは思っていたが、その予想をはるかに超え、会場の講義室がすぐ満席になるだけでなく、室外から椅子を運び込んでも足りず、立ち見すらできずに講義室に入れない方々が多く出るほどの状況になった。やむなくスピーカーを室外に設置して、会場に入れなかった方々に音声だけでも聴いてもらうようにしたが、驚くべき大盛況ぶりであった。NHK（テレビ）は、講演会当日のニュースにおいて、この講演会の模様を報じた。

二回目は、共著書などを通じて晩年の石岡繁雄と深く接した相田武男氏<sup>(13)</sup>、三回目は名古屋大学名誉教授で、本企画展にもご協力いただいた三矢保永氏による講演であった。これらも、会場の講義室が満席となり、椅子を運び込んで聴講者が何とか入りきるといった状況であった。

一つの企画展に際して企画された講演会のいずれもが、ここまでそろって盛況を博する例は珍しいであろう。

## むすびにかえて

本企画展は二〇一四年一月三〇日、会期中に五四二〇人の入館者を得て、好評のうちに終了した。この数は、一般には必ずしも有名とは言えない人物の個人資料の展示会としては、異例の数字ではないかと思われる。三回の特別講演会の盛況ぶりは前述の通りであり、一月一八日に展示会場でおこなわれたギャラリートークにも、筆者がこれまで経験した企画展とは比べ物にならないほど多くの人々が集まった。

石岡資料が本学に寄贈・寄託されるにあたって、新聞等のメディアがこれを大きく報じたことはすでに述べたが、本企画展を開催するにあたっては、それ以上に大きくメディアに取り上げられた。主要新聞による報道のほか、今回はテレビとラジオでも本企画展の開催が報じられた。<sup>15</sup> とくにNHK（テレビ）とCBCラジオは熱心な取材をおこない、前者は平日の一八時台、後者は土曜日の午前中という重要な時間帯に、かなりの時間を割いて石岡繁雄の生涯やナイロンザイル事件についての特集を組んだ。インターネットでも、本企画展の開催が広く報道されていた。またこの企画展をきっかけに、独立行政法人製品評価技術基盤機構（n i t e）が、ナイロンザイル切断実験をあらためておこなうことになったという一幕も見られた。

ナイロンザイル事件は、山岳界にしろ学界にしろ、ザイル生産業界にしろ、その分野の権威によつていったん定着した説は、たとえそれが明らかな誤りであつても、それをくつがえすことがどれだけ難しいかという問題を、われわれに突きつけている。

ナイロンザイル事件の場合は、篠田軍治が日本の基幹的総合大学の教授であるだけではなく、山岳会の権威でも

あり、これに業界大手企業が結びついたという意味で、その困難は想像を超えたものとなった。また、こうした現象にマスコミが手を貸したという側面も否定できない。

そしてとくに、最高学府に身を置き、その発言が大きな権威として定着しかねない立場にいる大学の研究者は、ナイロンザイル事件に学び身を正して研究にあたるべきであると思う。名古屋大学が石岡繁雄資料を受け入れたのは、石岡が名古屋大学に深い関わりのある人物であるだけでなく、こうした現代的意義を持つているからである。確かに現在は、当時に比べ情報伝達の手段が飛躍的に発達したため、あるいは同じようなことが起こっても、ナイロンザイル事件のような展開にはならないかもしれない。また、消費者の利益を重視する考え方が、ある程度は社会に定着している。しかしそのような時代にあっても、例えば近年のあまりにも大きな例としては、原子力発電のいわゆる「安全神話」は、政府と学界の権威が癒着してつくられたものといえるし、ごく最近においても二〇一三年の下半期において連日のように報道された食品偽装問題が起こっている。ナイロンザイル事件の現代的意義は、ある意味で残念ではあるが依然として大きいといえる。

業界の権威というものが現在よりもきわめて大きな存在であり、情報伝達手段が未発達で一度定着したイメージを払拭することが現在よりもきわめて難しかった当時、ねばり強く各界の権威や社会の風潮に立ち向かっていった石岡繁雄の強靱な意志と、事件の解決にかける執念にはあらためて驚かされる。もし石岡繁雄やそれを支えた人々の活動がなければ、この事件はうやむやのうちに終わってしまい、被害者は泣き寝入りになっただけではなく、さらに多くの人々が犠牲になったであろうことを考えても、ナイロンザイル事件に学ぶ意義の大きさを感ぜざるをえない。

今回、こうした大きな現代的意義を持つナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯に関する展示をおこない、それが

社会からの少なからぬ反響と評価を得たことは大きな成果である。またそれに加えて、その石岡という人物が本学によって輩出され、事件当時において石岡を支えた人々が学内に少なからずいたことを考えると、本学の歴史を学内外にアピールするという本室の重要なミッションも大きく果たすことができたと自負している。

あとは、本室が寄託をうけた石岡繁雄文書資料を、できるだけ早く一般公開し、社会や研究者の負託に応えることが、本室の当面の課題である。







名古屋大学博物館（古川記念館）



名古屋大学博物館入口



展示会場に隣接する廊下



第1コーナー全景①



第1コーナー全景②



第1コーナー①



第1コーナー②



第1コーナー③



第1コーナー①



第2コーナー①



第2コーナー②



第2コーナー①



第2コーナー②



第2コーナー③



第2コーナー④



第2コーナー⑤



第2コーナー⑥



第2コーナー⑦



第2コーナー⑧



第2コーナー⑨





第2コーナー⑩



第3コーナー①



第3コーナー全景②



第3コーナー①



第3コーナー②



解説ボランティア席



観覧の様子①



観覧の様子②





## こあいさつ

石岡繁雄氏は物理学者・工学研究者であり、安全学や山岳教育を通して多くの人材を育てた教育者です。また、井上靖の小説『氷壁』の題材ともなった人物です。

1985年に起こった弟（若山五朗氏）の前穂高岳での墜落死を契機に、石岡氏はナイロンザイルの弱点を直視することになります。それから約20年間、これ以上山での犠牲者を出さないために、氏は仲間とともにナイロンザイルの弱点を訴え続けます。氏の執念はこのナイロンザイル事件を乗り越え、登山道具や介護用機器などの開発にまで及びました。

石岡繁雄氏は名古屋帝国大学出身であり、一時期は名古屋大学職員でもありました。また、1990年に名古屋大学史編集室が編さんした『写真集名古屋大学の歴史』では、氏から多くの写真を提供していただきました。このような縁もあり、2012年、石岡繁雄氏の資料が名古屋大学の大学文書資料室と博物館に寄託、寄贈されました。今回の展示は大学文書資料室とともに、この貴重な資料などをもとに氏の生涯を紹介することで、多くの方に氏の人生と氏の目指した安全学に接れて頂くことを願って開催しました。なお、展示は3つの部門に分かれていますが、ナイロンザイル事件を軸立に取り上げたため、一部時代が前後します。

石岡繁雄氏の資料の寄託・寄贈は、ご運抵の石岡あづみさんと「石岡繁雄の志を伝える会」会員、岩井会会員をはじめとする方々の多大な努力の上に実現いたしました。また、これらの方を含む以下の方々には、展示について様々なご協力をいただきました。開催にあたり、こにお礼を申し上げます。

（あいうえお順・敬称略）

相田武男、石原國利、河合義久、川角信夫、澤田榮介、柴山昌洋、菅沼敏雄、高橋佑磨、立岡恭一、徳山加藤、藤田社二、前田幸雄、松本亮三、水野高司、三矢保永、森川文夫  
朝日新聞社、あるむ、井上靖文学館、市立大町山岳博物館、中日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社

名古屋大学 博物館／大学文書資料室

《第一コーナー》

## バックスと山 石岡繁雄の前半生



# 石岡繁雄 1918-2006

石岡さんは名アルビニストであると共に、志を持った数少ない登山家の一人である。

私は氏の実弟の遺囑事件をモデルにして『氷壁』という小説を書いているが、

私に『氷壁』の筆を執らしめたものは、事件そのものよりも、

寧ろその悲劇を大きく登山界にプラスするものであらしめようとする

氏の志に他ならなかったと思う。

井上 猪

(石岡繁雄著「屏風岩登攀記」刊行によせてより抜粋)

米国サクラメント市生まれ。愛知県津島中学、第八高等学校を経て、名古屋帝国大学工学部電気学科卒。戦後三重県鈴鹿市にて岩壁会設立、屏風岩中央カンゾウ初登攀。

昭和30年1月前穂高でザイル切断により実弟を失う。これを引きかけに“ザイロンザイル事件”が発生。事件解決の努力の中で登山用緩衝装置等47件の特許を取得。豊田高専、鈴鹿高専教授、三重県山岳連盟会長などを歴任、石岡高所安全研究所所長。

## バックカスと山

石岡繁雄の前半生

子供の頃から山に憧れた石岡。

一方で、天文や物理を愛し、探究心にあふれた青年に成長します。かけがえのない妻や山の仲間たちとの出会いもありました。

## 石岡繁雄年表

年	事	注
1918. 1. 25	0	アメリカ合衆国カリフォルニア州サクラメント市にて移民中の若山繁二・原虎の長男として生まれる
1920. 7	2	若山繁二の愛知県海部郡佐織村（現在の愛西市）に帰国
1930. 3	12	北河田小学校卒業
1933	15	白馬岳初登山
1935. 3	17	津島中学校卒業
1936. 4	18	第八高等学校文芸部入学
1937. 4	19	第八高等学校理科入学
1938	20	足利愛媛鐵道社に着手
1940. 4	22	名古屋大学工学部電気学科入学
1942. 9	24	名古屋大学卒業
1943. 1. 15	24	海軍技術中尉任官第二海軍燃料廠勤務
1943. 4	25	海軍技術大尉任官
1944. 9. 23	26	石岡繁二と結婚。三重県鈴鹿市在住
1945. 4. 10	27	長女・梓誕生
1945. 8. 15	27	陸戦と共に退役
1945. 9. 30	27	旧制神戸中学校物理教師となる。山岳部設立
1946. 4	28	岩盤会設立
1947. 3. 31	29	旧制神戸中学校退職
1947. 4	29	ホテル飲食（電気通信販売店）設立
1947. 7. 25	29	原島岩中央カプラー製造
1949. 9. 25	31	著書『原島岩製靴』初版、朝学書房より出版（以降、再版・文庫版などを含め4回出版）
1952. 2. 17	34	二女、あづま誕生
1952. 12	34	ホテル飲食業 名古屋大学・学生部に就職、名古屋市中区に転居
1954. 3. 5	36	名古屋大学にて学長選挙参選に失敗
1954. 9	36	母子「奨学生の推薦状について」発表
1955. 1. 2	36	前橋高英館にて8mmカメラの切斷で若山五郎（繁雄の弟）撮影

## 1 誕生

石岡（旧姓若山）繁雄は1918（大正7）年1月25日、アメリカ合衆国カリフォルニア州サクラメント市で生まれました。

若山家は愛知県海部郡佐織村（現在の愛西市）の農家でしたが、当時の農村はたいへん貧しく、繁雄の祖父の弟は貧乏を苦に自殺してしまっただけでした。この貧しさから逃れようと、繁雄の父繁二も、すでにアメリカにいた兄をたよってサクラメントに移住し、農民として働きました。

アメリカでの生活にめどがたつた繁二はその後、郷里のとなり町から嫁をもらい、5男をもうけました。繁雄はその長男でした。

## 2 帰 国

愛西市の出身者には、出漁中に難破してアメリカ船に助けられた後、カリフォルニアの農園で働いた者がいました。こうした縁で、愛西市からは1891年から1924年の間に640名もの人々が渡米しています。移民の生活は厳しいものでしたが、短期間で一財産をつくることも可能でした。

1920年(大正9)年7月頃、父の繁二は約20年間の移民生活を終え故郷に帰ります。当時3歳だった繁雄もこのとき帰国しました。

## 3 山との出会い

繁雄は濃尾平野という、山とは関係の少ない場所で育ちました。初めて山といえる所へ行ったのは、父が湯の山温泉へ連れて行ってくれた時でした。

その後旧制中学校時代、繁雄は白馬岳に登って山のとりこになります。登山は繁雄にとってかけがえのないものとなり、繁雄や周りの人々の生き方に大きな影響を与えることになります。

#### 4 繁雄と八高・名古屋帝大

繁雄は小さい頃、「すべての成績が優」というほど優秀で、絵や作文も得意でした。しかし、中学時代に将棋のとりこになり、八高の入学試験に落ちてしまいます。

浪人中、受験勉強に専念するようにと繁雄の父は、彼を八高に近い名古屋市千種区に下宿させました。この下宿先が石岡家だったのです。翌年繁雄は八高文科に入学（1年後理科に再入学）し、1940（昭和15）年には名古屋帝大理工学部電気学科に入学しました。

#### 5 最愛なる妻・敏子（1）

石岡家の実家は鈴鹿市神戸<sup>かぶの</sup>の大地主で、敏子はその一人娘でした。父の正一が東海銀行（現在の三菱東京UFJ銀行）の名古屋支店長をしていた頃、一家は名古屋市に住んでいましたが、父の帰りがよく遅くなりました。帰りを待つのが妻と一人娘の敏子だけでは不用心と、用心棒もかねて下宿してもらったのが繁雄でした。やがて、敏子の母は繁雄の人柄にほれ込み、ぜひ敏子の婿にと希望します。繁雄17歳、敏子7歳のとき二人は許嫁<sup>いひよすめ</sup>となり、その8年後に結婚します。

## 6 最愛なる妻・敏子(2)

敏子は体が弱かったため、繁雄は敏子の母から、敏子を登山に連れて行ってほしいと頼まれます。こうして敏子は繁雄とともに、9歳で槍ヶ岳に、10歳で白馬岳に登頂します。11歳からはロッククライミングに打ち込み、13歳で槍ヶ岳の小槍を、15歳で穂高岳の滝谷に登りました。

その後も敏子は、二人の娘を育てながらも、ときには繁雄と登山を楽しみました。敏子は2004(平成16)年に心臓病で亡くなりますが、若い頃からその最期までの約70年、繁雄に見守られ、また繁雄を支える人生を歩みました。

## 7 卒業後の石岡

太平洋戦争下の措置としてとられた繰上げ卒業によって、石岡は海軍技術中尉(後、大尉)として勤務します。終戦後は旧制神戸中学の教師、名古屋大学の職員にもなりました。石岡はサイロンザイル事件に遭う前から、仕事における問題点をまっすぐな眼差しで見つめ、解決への提案をおこなっています。

## 8 岩稜会

終戦後、石岡は三重県立旧制神戸中学校（現在の三重県立神戸高等学校）の教師となります。石岡から山の話聞いた生徒たちが熱望した結果、石岡は山岳部を作ります。さらに、翌年には卒業生となった部員などと共に「岩稜会」を創設しました。この会の会員は、多くの難しい山々、そしてナイロンザイル事件を、石岡とともに闘う同志となったのです。

岩稜会は名古屋大学の山岳部とともにヒマラヤ遠征をめざしたこともありました。しかし最後になつてネパール政府からの許可が下りず、断念せざるを得ませんでした。

## 9 終戦直後の登山

1945（昭和20）年12月、石岡は生徒たちと鈴鹿山脈の鎌ヶ岳に登ります。しかし生徒の中には、リュックがなくて南京袋をかついでいる者や、“むしる”を二つ折りにして履<sup>は</sup>き合わせ、荒糲<sup>あら</sup>でしぱりつけている者もいました。当時の一般家庭の事情を考え、山行中の食事はコメはひかえサツマイモにしたところ、腹に力が入りませんでした。体力の消耗で部員達は危険なほどよく転びました。

このときの辛い思いから、石岡らはその後の登山にはコメを持っていくようにします（部員のほとんどが農家の息子なので可能でした）。また、旧陸軍の天幕を手に入れてテントやリュック、ウインドライヤックなどを作り、共通の装備としました。登山時の部員の服装は、いつも着ている学生服や父親の古い青広などでした。



《第21号》

# ナイロビ事件

## 石岡と岩稜会、20年の闘い



### 10 屏風岩登攀

前穂高岳（標高3090m）は飛騨山脈（北アルプス）にある穂高連峰の山です。穂高の山域は剣岳や谷川岳などと並ぶ日本有数の岩場で、なかでも前穂高岳には登るのが難しい未知の岩場が多く、魅力あふれるところでした。この前穂高に連なるもっとも難しい岩場で、登攀不可能といわれていた屏風岩（正面の中央カント）と呼ばれるルートに、1947（昭和22）年、石岡は旧制神戸中学山岳部員、そして着に卒業した山岳部OBの計3人で挑みます。

\*カント＝岩壁の突き出している部分





## 石岡繁雄年表

# ナイロブザイル事件 石岡と岩稜会、20年の闘い

単の消落死——このときの日本のナイロブザイルが石岡の人生を変えます。

一時は社会から否定されながらも、

石岡と岩稜会は、人命と名誉回復のため、真実を求めて闘います。

年/月/日	年齢	出来事
1955. 1. 2	36	岩稜会創立にてBOMナイロブザイルの出現で山五郎（繁雄の弟）遭害 名古指吉の直に実弟川本繁治を殺害、弟のナイロブザイルの発見 明実録を始める
1955. 1	37	ナイロブザイル電報機銃の公開実験が東京朝日新聞社にて徳田重治指 導のもと行われる。故意にナイロブザイルが切れない実験をし、ここに「ナ イロブザイル事件」が勃発する
1955. 4. 29	37	山五郎の遺体がB区にて発見。切れたナイロブザイルはしつかりと林に 落ちていた
1955. 7. 31	37	山五郎の遺体発見にふられる。開始にザイルを渡す
1955. 8. 4	37	山五郎の遺体発見にふられる。開始にザイルを渡す
1955. 8. 1	37	神戸城崎の地に木にてナイロブザイル実験を行う
1956. 6. 22	38	徳田重治を名義実録で告発
1956. 7. 1	38	冊子「ナイロブ・ザイル事件」160部、岩稜会が発行
1956. 9	38	冊子「ナイロブ・ザイル事件」が安山茂雄から井上博に渡る。「岩稜」事件 のため石岡蘭利・石岡繁雄らが井上博訪問し、蘭利化を検討
1956. 11. 24	38	朝日新聞に「岩稜」の連載開始
1956. 12. 11	38	岩山策二（繁雄父）夫妻のちに「ナイロブザイル事件をやじにするな」 と書状を致し死去
1957. 7. 23	39	徳田重治の著述調査係が不眠不休となる
1958. 2. 22	40	徳田重治著「第一回公開実験」送付。その後「第三回」まで送付
1958. 10. 22	40	中部日本放送で「第二回公開実験」の徳田重治の遺言がラジオで放送 される。徳田は「蘭利における公開実験は進行中や私秘に使用」の英 訳であり、岩稜会の事故の実録とは無関係」と発言
1959. 6. 31	41	冊子「ナイロブザイル事件」具止符を打つに当たっての声明」を岩稜会が発行
1973. 3. 11	55	「ナイロブザイルの性態に関する公開実験」が石岡の弟の元、三重県山岳 運動主催で林業工業教育専門学校において行われる
1973. 11. 8	55	運動会後製品安全協会の登山用ザイル安全基準調査委員会となる （1991年まで）
1975. 6. 5	57	登山用ロープ安全認定基準、官費で交付。ナイロブザイルの弱点が認め られる
1976. 12. 9	58	日本山岳会発行「山日記」に、徳田重治のナイロブザイルに関する記述した 見解を載せたことへのお詫び文掲載される
1977. 7	59	冊子「ナイロブザイル事件報告書」を岩稜会が発行
1989. 11. 6	71	日本山岳会が徳田重治を名誉会員に推薦。石岡蘭利と共に名誉会員反対 運動をするが、1990年1月徳田の名義会員が変更。以後、日本山岳会に 対して名誉会員取消のために要請書や公開質問状を何度も提出するが、 いまだ解決をみない。
2006. 1. 28	88	静岡県長岡町（旧「上郷文書館」）訪問。ナイロブザイル事件展示見学
2007. 1. 25	-	徳田重治との共著「石岡繁雄が語る 水曜・ナイロブザイル事件の真実」 ある6より出版

## 1 事件の発生とその反響

### 1 若山五郎の転落事故起こる

1955 (昭和30) 年1月2日、北アルプス前穂高岳東壁の厳冬期初登攀に挑戦していた、岩稜会登山隊の3人パーティの1人である若山五郎 (三重大学1年) が遭難しました。頂上直下において、自身の体重を支えるために険しい岩壁から突き出た岩にかけたナイロン製のサイクル (ロープ) の切断によって転落し、行方不明になったのです。これが以後20年にわたる、いわゆるナイロンサイクル事件の発端でした。



## ② 注目されたナイロンザイルの切断

若山五朗に同行したザイルパートナーの石原國利（中央大学4年）と澤田幾介（三重大学3年）の生還によって、転落の原因がナイロンザイルの切断によることが明らかにになると、この事故は登山界やマスコミの注目を集めました。ナイロンザイルは、従来の麻ザイルよりも扱いやすいうえに強度もすぐれた新製品として注目されていたからです。そして事故直後から、早くもザイル切断の原因を使用者のミスに求める説が登場するのです。



## ③ 石岡の検証実験開始

当時名古屋大学の職員であった石岡繁雄は、実弟である若山五朗やそのザイルパートナー、岩稜会の名譽と将来にわたる登山者の生命を守るため、科学的重づけもなく早まった結論を出すことに「重鎮を鳴らすとともに、自らの手でナイロンザイルの強度を試す実験をはじめました。自宅での実験のほか、名古屋大学などでも実験をおこない、ナイロンザイルが鋭い岩角において重大な欠陥を持ち、それが切断の原因であったことへの確信を深めていきました。



#### 4 篠田軍治と東京製網

石岡は実験の結果を発表し、ナイロンザイルに重大な弱点がある可能性を示しました。これをうけて、このザイルを生産した東京製網<sup>トウキョウセイコ</sup>による公開実験が、大阪大学工学部教授で日本山岳会関西支部長でもあった篠田軍治<sup>ノノタ イクサチ</sup>の指導の下におこなわれることになりました。ただ石岡は自分の実験に自信を持ち、さらに篠田も石岡との面談では石岡の実験を肯定する発言<sup>コウブツ</sup>をしていたため、公開実験には出席せず、いまだ行方不明の五朗の捜索へ出発したのです。



#### 2

#### 人命と名誉回復のための闘い ——第一次収束まで——

## ⑤ 蒲郡の公開実験と ナイロンザイル安全論の拡大

1955(昭和30)年4月29日、東京製綱蒲郡工場(愛知県蒲郡市)にマスコミや山岳関係者を集め、ナイロンザイルの岩角に対する強度を確かめる公開実験がおこなわれました。その結果は、ナイロンザイルは岩角に耐え、その強度があらためて証明されたという、石岡にとって全く予想もしなかった驚くべきものでした。これは実験の重大な作為によるものでしたが、切断しなかったという事実だけがマスコミなどを通じて大々的に報道され、ナイロンザイル安全論が一気に拡大することになったのです。



## ⑥ 社会からの批判と石岡家の苦しみ

ナイロンザイルは強いという印象を一般に与えた公開実験によって、五朗本人だけではなく、ザイルの取り扱いの失敗を隠そうとしたとして、石岡や岩井会への批判や中傷が強まりました。石岡はこれに反論しますが、登山界と学界の権威を背景とした業界大手企業による公開実験の結果という、厚い壁が立ち上がりました。石岡は、一時は妻父から親子の縁を切ることを言いわたされます。逆風のなか、1955(昭和30)年7月31日に、切れたザイルを身体につないだままの五朗の遺体が発見されました。



## 7 公開実験への疑惑と篠田の態度

石岡は、公開実験に使われた岩角に、離れた位置からでは見えないわずか1ミリほどの丸みが付けられていたために、ザイルが切れなかったことを知ります。その後、さらに詳細な再検証をおこなって自信を深めた石岡は、篠田軍治にこれを問います。しかし篠田は、ナイロンザイルの岩角に対する欠陥によって事故が起こったことや、蒲郡の実験に重大な作為があったことを、公式には決して認めませんでした。石岡らの、篠田やメーカーへの不信はつづいていきます。



## 8 「ナイロンザイル事件」の社会問題化

石岡ら岩援会は、篠田やメーカーと全面的に対決することを決意しました。その後も相手方からの誠意ある対応は見られず、逆にナイロンザイル安全論が拡大していくありました。ついに岩援会の石原國利は、1956（昭和31）年6月22日付けで篠田を名譽棄損で名古屋地検に告訴します。その翌月には、岩援会がこれまでのいきさつをまとめた冊子『ナイロン・ザイル事件』を作成して山岳関係者やマスコミなどに配付し、あらためて社会の注目を集めました。



## 9 小説『氷壁』とナイロンザイル事件

1956 (昭和31) 年11月24日、朝日新聞紙上にあって、井上靖による小説『氷壁』の連載がはじまりました。厳冬の前穂高岳氷壁でのナイロンザイルの切断による転落事故、ザイルの欠陥をめぐる主人公と企業や社会との確執など、現実のナイロンザイル事件を素材としたこの小説は大きな反響を呼び、早くも1958年には映画化されました。これによって、多くの人々が事件のことを知るようになりました。



## 10 続く闘いと厚い壁

告訴は、説明なしに大阪地検の扱いになったうえ、不起訴処分に終わりましたが、石岡と岩壁会は篠田への公開質問状などによってねばり強く闘い続けました。篠田やメーカーは、これに対してあいまいな説明しかできず、マスコミなどの論調にも変化が見られるようになります。それでも、蒲郡実験と学界や業界の権威を盾にしたナイロンザイル安全論を完全にくつがえすことは容易ではなく、その間にもナイロンザイルの切断による犠牲者が増えていったのです。



## ⑪ 終止符宣言

1959 (昭和34) 年8月30日、岩棲会は「ナイロンサイル事件に終止符をうつにさいしての声明」を発表し、事件を収束させることにしました。これは、篠田やメーカーからまともな反論がなく、蒲郡実験の作為とそれに際しての篠田とメーカーとの特殊な関係性など、岩棲会の主張が実質的に認められたと判断したからです。この頃になると、マスコミ等の論調も、石岡や岩棲会の主張を支持するものが多くなりつつありました。

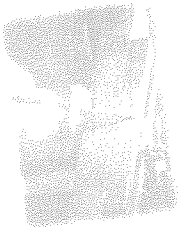


## 3 再展開から決着へ



## 12 相つぐ事故と闘いの再開

しかし終止符宣言後も、依然としてナイロンザイルの岩角に対する弱点は放置され、重大な転落事故が跡をたちませんでした。石岡ら岩稜会は、1971（昭和46）年から事件解決のための活動を再開することになりました。その際に主な目的としたのは、ナイロンザイルの取り扱い業者にその危険性を表示させることと、ナイロンザイル安全論を定着させる大きな要因になった『山日記』を日本山岳会に修正させることでした。



## 13 公開実験による論争の決着

石岡ら岩稜会の主張は、その支持者を拡大していきましました。すでに、ナイロンザイルの欠陥を認めるメーカーも現れており、もうひと押しというところでした。そして1973（昭和48）年3月11日、石岡は勤務先である鈴鹿高専で公開実験をおこないます。多くのマスコミや関係者の目の前で、蒲郡実験の誤りとナイロンザイルの危険性を明快に証明したこの実験のインパクトはきわめて大きく、長年の論争に決着をつけるものでした。



#### 14 消費生活用製品安全法と 安全基準の制定

公開実験から3ヵ月後の1973（昭和48）年6月6日に消費生活用製品安全法が制定されました。そして、登山用ロープもこの法律の対象となり、1975年6月5日には登山用ロープの安全基準が定められました。石岡は、この基準を定めるための通産省の調査委員会に名前を連ねました。吉山五朗の遺難から20年をへて、ナイロンザイルの弱点をふまえた安全な使い方が日本に定着することになったのです。



#### 15 『山日記』の訂正

最後の関門は、日本で最も長い歴史を持つ山岳団体である日本山岳会が、登山者の安全のために毎年刊行していた『山日記』の訂正でした。1966（昭和31）年版に篠田が書いた、ナイロンザイルの岩角での強さを強調する記述は、それ以後も大きな影響力を持ったからです。篠田は最後までその訂正の必要性を認めませんでした。日本山岳会の判断により、1977年版『山日記』において、編集の<sup>ふだき</sup>不<sup>ふ</sup>行き<sup>ぎ</sup>直<sup>ただ</sup>きを認めて関係者へ謝罪する記事が掲載されました。



## 16 石岡を支えた人々とその思い

石岡は、その強靱な意志とたくいまれな実行力をもって長く困難な闘いを続けましたが、決して孤独だったわけではありません。敏子夫人をはじめとする家族や岩棲会の人々は石岡を信頼し、その活動を支え身的に支えました。その他の山岳団体では、三重県山岳連盟が一貫して石岡を強く支持しました。石岡が勤務していた名古屋大学にも、当初の石岡らの活動を支援した教員や学生がいました。



## 17 未解決の日本山岳会名誉会員問題

1989(平成元)年、日本山岳会評議会は篠田重治を名誉会員に推せんすることを決定しました。前年にも関西支部が名誉会員への推せんを評議会に発議しましたが、一度は評議員の一部からの反対により見送られていたのです。これに対し石岡は、ナイロンザイル事件が解決し、篠田のおこなった行為が明らかになった以上、名誉会員とすることなど決してあってはならないと強く反対しました。しかし、日本山岳会はこれを強行し、その後の石岡の再三のはたらきかけにもかかわらず、取り消されることなく現在に至っています。



《第3コーナー》

# 「氷壁」を越えて

## 石岡がめざした安全学



# 「氷壁」を越えて

## 石岡がめざした安全学

ナイロンゼイル事件を乗り越えた彼は、山道具や昇降機器の開発など、  
研究や教育を通じて安全学に大きく貢献し、  
その志は、いまでも多くの人の胸に刻まれています。

## 石岡繁雄年表

年	事
1957. 9. 1	39 「ヒラヤ(ジャズ)遠征計画」(名古屋大学山岳部・岩壁会)
1958. 11. 17	40 「震災時にあける登山機防正装置」(特許取得(特発・生産)で2019年の特許出願)
1959. 7. 15	41 岩壁会「登山の現場」1、朋文堂より出版
1960. 6. 10	42 岩壁会「登山の現場」1、朋文堂より出版
1961. 4. 23	43 日本山岳文学部を創設
1962. 10. 24	44 参内外国特許出願補助金を「ばね式自動安全装置」で認められる
1963. 11. 22	45 同学生の建築事務所において日本育英会より奨励金授与
1964. 2. 1	46 豊田工業高等専門学校 助教に就任・物理教官となる
1969	51 豊田工業高等専門学校を平成2年まで勤める
1969. 4. 1	51 豊田工業高等専門学校教授に就任
1971. 4. 1	53 約県工業高等専門学校にて講演
1972. 7. 30	55 スズキ設立スキー・登山学校にて講演
1976. 1. 16	57 愛知県東海市消防出初式のベンチャーロープ技術事務所の開所を祝賀
1976. 5	58 三興興山岳運動会会長就任(1981年まで)
1978. 7	60 「三重県道7号アルプス登山所行」ヴァン・ホーブ登山実録(石岡夫妻は登山せず)
1978. 10. 10	60 岩壁会が「社会体育委員団」として文部大臣より認められる
1981. 6. 14	63 「レイカー株式会社」設立(石岡自身は同会公務員のための役員にはならず)
1983. 2. 26	65 約県工業高等専門学校退官
1983. 6	65 震災後援を受けての講演会を精励し、翌年の2月に「震災前後援会」を創出
1984. 2. 7	66 「石岡研究所安全研究所」設立
1987. 5. 30	69 「岩壁」岩壁会40周年記念制作・非売品
1988. 8	70 石岡研究所安全降下具「ハイセーバー」TBR株式会社より発売
1990. 4. 16	72 「株式会社ハイセーバー研究所」設立(石岡は取締役となる)
1991. 11. 9	73 「約の会」理功助「ババカ」・三重県助「ふん」で受賞
1993. 12. 7	75 有限会社「石岡研究所安全研究所」設立
1998. 7. 12	80 イケリクエゾーワールド大学で開かれた「スポーツ工学国際学会」に出席、登山用自動制動装置システムについて講演
2000. 3. 21	82 「震災における要介護者の支援装置」ハイカー213号機まで完成
2004. 6. 2	86 石岡教授法を
2004. 10. 14	86 「有限会社石岡研究所安全研究所」新設開業
2005. 5. 1	87 著書「アルプスに夢みち、あるひと出版
2006. 4. 1	88 岩壁会後援の会合
2006. 8. 15	88 午前9時17分 名古屋第一日赤病院にて大動脈瘤破裂のショックにより死去
2012. 12. 27	- 名古屋大学文学部資料室へ石岡繁雄資料室を、名古屋大学博物館へ遺品・物品の寄贈

### 1 「氷壁」を越えて

石岡繁雄は1964(昭和39)年に豊田工業高等専門学校 助教授に就任します。その後1969年に教授となり、1971年から83年までは鈴鹿工業高等専門学校の教授を務めます。

学生たちに物理などを教えるかわら、石岡は安全な登山装置や高所安全降下具の開発に情熱を注ぎます。ナイロンサイル事件に人生を大きく左右された石岡ですが、それ乗り越えた彼は、教育や研究を通じて安全学に大きな貢献を果たしました。

## 2 安全な登山をめざして

ナイロンザイルが素材の性能上岩角での衝撃に弱いとわかって、ザイルを頼らずに岩登りはできません。衝撃を受けてもザイルが切れないようにするにはどうしたらいいのか……石岡は工夫に工夫を重ねます。そして1958(昭和33)年、「衝撃時における登山綱切断防止装置」を完成させ、特許を取りました。こうして石岡の安全装置の研究が本格化しました。石岡がその生涯に出願した特許や実用新案などは、200件を超えます。

## 3 石岡の発明装置

石岡が特許を取った発明品の多くは、人やものを安全に出来るだけ小さな力で上下に動かすことと結びついています。ザイルを使って安全確保をしながら山を登れるようになることと、リフトを使って車椅子などが安全に上下できるようなことは、石岡の中で自然につながっていったのでしょう。彼が発明した、ビルなど高所からの緊急避難装置などは、実用品として販売されたこともありました。



## ④ 自前の実験用鉄塔

昇降に関する自分の開発品が本当に安全であると認められるためには、検査基準を満たす高度での実験が必要でした。そこで石岡は自宅の裏に16mの実験塔を自費で建設します。約5階建の高さの「やぐら」のような鉄塔は、4階部分まで十数人の実験者が載って、5階部分から物を昇降させることができます。この塔で実験を積み重ねることで、石岡はさまざまな装置の開発に励みました。彼の死後の2008（平成20）年、塔は老朽化のため解体撤去されました。

## ⑤ ロープの安全性に関する確証に

ナイロンザイル事件をきっかけとして、石岡のもとにはロープの安全性に関する調査の依頼が舞い込むようになりました。物事をうやむやにせず、徹底的に検証する彼の取り組みによって、重大なロープ事故の原因が解明されています。

## 6 石岡の最期

2004（平成16）年、最愛の妻敏子から臓病で亡くなります。敏子の亡きあと悲嘆にくれた石岡は、生きる希望も失ってしまいました。同年、石岡高所安全研究所も解散閉鎖してしまいます。しかし、周囲の励ましや、残すべきものは残そうという強い意志から、ナイロンザイル事件に関わるまとまった著書を残すことに取り組みます。こうして、2005年には『ザイルに導かれて』、2007年には相田武男との共著『石岡繁雄が語る 氷壁・ナイロンザイル事件の真実』が出版されます。

石岡は2006（平成18）年8月15日午前9時7分、名古屋第一日赤病院にて、大動脈瘤破裂のショックによりあの世へと旅立ちました。ナイロンザイルの弱点隠しと闘い、その弱点克服に苦しみながらも、最期は「ザイルに導かれ」という心境に至った彼の人生は、88年の幕を閉じたのでした。

## 7 石岡の志を伝えたい

石岡繁雄の没後、岩波会のメンバーや豊田高専・鈴鹿高専の教え子など石岡を慕う人々は、安全に生涯を賭けた彼の志を伝えるため、彼の遺した膨大な資料の整理に取り組みしました。こうしてまとめられた資料は、文書・画像類が約12000点、物品が約500点になりました。没後6年の2012（平成24）年8月、これらの資料のうち、文書・画像などは「石岡繁雄資料」として名古屋大学文書資料室に寄託され、物品資料は「石岡繁雄コレクション」として名古屋大学博物館に寄贈されました。



写真・図表バネル一覧

番号	写真・図表名	説明文・備考
第1コーナー		
写真・図表 1-0	石岡繁雄 1918-2006 (朝日新聞社撮影)	石岡さんは名アルピニストであると共に、志を持った数少ない登山家の一入である。私は氏の実弟の遭難事件をモデルにして『氷壁』という小説を書いているが、私に『氷壁』の筆を執らしめたものは、事件そのものよりも、寧ろその悲劇を大きく登山界にブラスするものであらしめようとする氏の志に他ならなかったと思う。井上靖 (石岡繁雄著『屏風岩登攀記』刊行によせて より抜粋)
写真・図表 1-1-1	サクラメントでの暮らし (1910年代)	米国サクラメント市生まれ。愛知県津島中学、第八高等学校を経て、名古屋帝国大学工学部電気学科卒。戦後三重県鈴鹿市にて岩稜会設立、屏風岩中央カンテ初登攀。昭和30年1月前穂高でサイル切断により実弟を失う。これをきっかけに“ナイロンザイル事件”が発生。事件解決の努力の中で登山用緩衝装置等47件の特許を取得。豊田高専、鈴鹿高専教授、三重県山岳連盟会長などを歴任、石岡高所安全研究所所長。
写真・図表 1-1-2	サクラメントの畑で (1919年頃)	掘手する父 繁二 (右から2番目) とボーズをとる母 照尾 (右端)。
写真・図表 1-1-3	母 照尾と (1918年)	農作業をする人々と肩車されている父 (左から4番目)。
写真・図表 1-2	綿国の船上で母と (1920年)	
写真・図表 1-3-1	燕岳で野口五郎岳などを背景に (1936年)	八高時代の7月、ガイドを雇い、5泊かけて北アルプスの燕 (つばくろ) 岳、箱ヶ岳、焼岳を登ったときの一枚。
写真・図表 1-3-2	雄山 (立山) 山頂で (1941年)	10月、立山の天狗平から雄山、針ノ木岳へと一人で登山したときの写真。

写真・図表 1-3-3	登山をはじめた頃の想い出を石岡が記した文章	「御在所の裏道を登り始め、すぐ右折し蒼滝の上へ出た。近づくにつれて音を立てて幅5m高さ15m程の滝があった。私は初めて滝を見たのでビックリした。滝の幅はいくつかに別れ、その間に黄色い岩が出ていた。その何本かの岩の筋に捕まって登れないかと一生懸命目を動かしていた。もう、その時から、岩登りには興味があったように思う。」(石岡繁雄著『ザイルに導かれて』より)
写真・図表 1-4-1	山でハーモニカを吹く繁雄(1939年)	「次の本格的な登山は、中学4年の時、私は従兄と色々と相談していたが、父は言下で「危険だからやめておけ」と言った。しかし諦めきれず、名古屋のデパートでおもちゃのビックルと4本爪のかんじきを買いきり、又、白馬岳の案内書を買った。父もついに諦めて、案内人を雇っての登山を許してくれた。(中略) まもなく大雪渓にかかる。長さ数kmの真夏の大雪渓にはまったく驚いた。大雪渓にはいたる所、クレバスと称する危壁があり、半日かかって登って行くと急な小雪渓があり、今夜泊まる村営小屋があり、その上の稜線に出たとき黒部の谷の向こうに立山・剣岳の雪を置いた山脈が並び、私はその光景を見て、その後、夜も昼もその光景がちらつき、山の魅力の虜となっていた。」(石岡繁雄著『ザイルに導かれて』より) ※写真なし
写真・図表 1-4-2	自作の天体望遠鏡を操る繁雄と、繁雄が撮影したアンドロメダ星雲、星の日間運動写真(1941年頃)	大学時代より、石岡は友人に「バック」と呼ばれ慕われていました。バックはギリシヤ神話の酒の神の名前です。お酒も大好きでしたが、本人は「山ばかりで、バックばかりやっているからバックの複数形」と笑っていたそうです。
写真・図表 1-4-3	同上	在学中は、勉学より登山や天体望遠鏡作りなどに情熱を注ぎ、父親から「退学させて丁稚(でっち)に出す」と言われたほどでした。自作の天体望遠鏡は、大学の研究者が視察に来るほどの出来でした。
写真・図表 1-4-4	同上	繁雄18歳、敏子8歳のとき、海水浴に行った写真。当時も二人は兄妹のように仲が良かったそうです。
写真・図表 1-5-1	三重県津市の香良洲海岸で幼い敏子と(1936年)	9月23日に結婚。三重県鈴鹿市に住みました。
写真・図表 1-5-2	繁雄と敏子の結婚写真(1944年)	

写真・図表 1-6-1	前穂高岳北尾根四峰の頂上で敏子と (1942 年)	
写真・図表 1-6-2	四国石鎚山の山頂で敏子と (1968 年)	
写真・図表 1-6-3	槍ヶ岳小槍の岩場で (1941 年)	矢印が岩壁を登る敏子。このときの登攀は新聞記事にもなりました (記事スクラップの提示もご覧ください)。※掲載写真には矢印なし。
写真・図表 1-7-1	海軍夏軍服の繁雄 (1945 年頃)	黒部溪谷の旅館の前で敏子 (右から 2 番め)、旅館の女将、敏子の母とともに。
写真・図表 1-7-2	長女 梓 (あずさ) が誕生 (1945 年)	石岡の海軍時代に敏子と結婚し、長女が誕生しました。石岡夫妻は「梓」「あつみ」の 2 人の娘に恵まれました。
写真・図表 1-8-1	神戸中学山岳部、岩稜会の淵沢合宿 (1946 年)	
写真・図表 1-8-2	岩稜会の仲間などと前穂高岳を背景に (前列左から 2 番目) (1950 年)	弟の若山五朗 (後列左端)、敏子と長女梓 (前列右端) もともに。
写真・図表 1-9-1	神戸中学時代の山行 (1945 年)	初めての冬山合宿に行った三重県の高妻峠で。登山靴はまだふうには売っておらず、みんな地下足袋で歩いていました。
写真・図表 1-9-2	雪で倒れた夏用テントを前に (1945 年)	薄い布地を何枚も縫い合わせて作ったテントは、夜になると縫い目から雪が入り込みました。そこで石岡は、旧陸軍の天幕を手に入れてテントやリュック、ウイソンドヤックなどを作り、共通の装備としました。
写真・図表 1-10-1	前穂高屏風岩	屏風岩は高度差 600m、姿見の鏡のような岩場です。何ヶ月も方法を思案した末、最後尾で、登攀ルートの判断、指示、安全確保を担当しました。先頭者は苦戦の末、手の届かない岩場では投げ縄を使うなど、危険な方法もいとわず挑戦します。その結果登攀に成功しますが、石岡自身は力尽き、岩場にかり残されて後から救助されます。

写真・図表 1-10-2	屏風岩の図と挑戦した各年のルート	屏風岩中央岩壁は、旧制八高山岳部の後輩で京都大学医学部に進学していた伊藤洋平らが先に「初登攀成功」と宣言します。伊藤は屏風岩中央岩壁登攀の可能性を石岡に提案し、二人は共に登攀ルートへの調査もしていました。しかし伊藤が初登攀に成功したというルートは、中央岩壁の稜間を外れていて初登攀とは認められないものでした(図の青矢印)。伊藤との友情が壊れてでも自分たちの「初登攀」を主張すべきか、石岡は深く悩みます(石岡らのルートは図の赤矢印)。そしてこのとき、苦悩の末に友情より真実を運んだことが、ナイロンザイル事件でも、権威や世評などより真実を求める彼の姿勢につながっていきます。
写真・図表 1-10-3	屏風岩初登攀時に救出されて(右から2番目)(1947年)	初登攀では、石岡が途中で力尽きて取り残され、死の恐怖とともに救助を待ちます。初登攀をめぐって確執のあった伊藤洋平(左から2番目)ですが、石岡は、伊藤が助けに来てくれることを疑いませんでした。
第2コーナー		
写真・図表 2-1-1	転落事故が起こった前穂高岳の位置	※地図2枚、「F-map」諸語済み。
写真・図表 2-1-2	前穂高岳奥又白池からの概念図と登攀ルート図	1955年元旦早朝6時、石原國利、澤田榮介、若山五朗のパーティは奥又白池・宝の木付近のベースキャンプを出発、7時30分にB沢上部でお互いをアンザイレン(お互いをザイルで結び合うこと)として、傾斜60度の北壁にとりつきました。雪が固まっておらず、非常に悪い状況の中、ようやく14時50分に第2テラスへ出て、さらに急な斜面を登って15時50分にAフエツキまじり着きました。昼食後、高さ80m、傾斜55度のAフエツキに降り、斜面でデバーク(緊急的な野営)しました。明けて2日、パーティは行動を開始しましたが、それまで先頭だった石原が疲れのため岩を乗り越えなかったため、若山が先頭となります。そこで転落事故が起こったのです。
写真・図表 2-1-3	遭難の前日に撮影された、前穂高岳を登る若山五朗らの風景写真	1955年1月1日午後、この時同じ前穂高岳にいた大阪市立大学山岳部のパーティの1人犬島健司氏が撮影したものです。2つのパーティは「ガンパレヨ」「ガンパレヨ」と声をかけて励まし合っていたといいます。独特のかけ声「アラヨヨ」を聞いたため、岩稜会だと分かったそうです。そしてくくも若山五朗遭難の翌日、犬島氏もナイロンザイルの切断による転落事故に遭いました(幸いにも命に別状はありませんでした)。

写真・図表 2-1-4	若山五朗（わかやま・ごろう 1935-1955）	若山家の五男として愛知県海部郡佐織村（現在の愛西市）に生まれ、愛知県立津島高等学校を卒業後、1954年4月に三重大学文学部（現在の教育学部）に入学しました。小学校時代から、実兄石岡繁雄に連れられて山に親しみ、その魅力に目覚めていきました。三重大学入学後、実家から離れて大学近くに住宿するようになったのち、三重大学山岳部で岩稜会とともに活動するようになりました。体力抜群のうえに、若いながらも鈴鹿山脈の難所の登山に単独で成功するなどの技術も持ち合わせていました。
写真・図表 2-1-5	同上	同上
写真・図表 2-2-1	石原國利（いしはら・くにとし、 1930-）	1930年、福岡県直方（のおがた）市に生まれ、福岡県立兼手中学校（旧制）、同兼手高等学校（新制）をへて、中央大学経済学部に入學しました。登山に従事することになったきっかけは、兄の石原一郎に連れられて九州の山を歩いたことでした。一郎が石岡繁雄と親しかつた関係で、遠方に住んでいたがら兄弟で岩稜会員となりました。そして経済学部4年生の時にナイロンザイル事件に遭遇することになりました。この年、法学部3年に転部し、卒業後、1957年に名古屋大学学生部に事務官として就職しました。1960年、東海地区ヒマラヤ遠征隊に参加、ネパールのジュガル・ヒマール、マデアイピーク（6,900m）に初登攀しました。1965年から66年にかけて名古屋大学・日本山岳会東海支部アソダス学術遠征隊（高木健太郎隊長）に参加し、コンカグア（6,960m）の登頂、フエゴ島モンテ・オリビタ（1,470m）の積雪期初登攀をはたしました。1966年、父の死去により装具品・美容用品製造師の家業を継承し、現在は合名会社石原商店・株式会社スラン・有限会社ススランクラフト 3社の会長を務めています。

写真・図表2-22	澤田榮介（さわだ・えいすけ 1933-）	<p>1933年、三重県鈴鹿市で生まれ、三重県立神戸高等学校を卒業後、三重大学農学部に入學しました。岩稜会では石原國利ととくぐに親しく、岩稜会の合宿が終わったあたりとも、一緒に各地の登山に出かけていました。そして3年生の冬山合宿の時にナイロンザイル事件に遭遇することになりました。この遭難で、凍傷のため右足の指の3本を失いましたが、その後も登山をライフワークとして現在に至っています。大学卒業後、1957年に厚生省大臣官房国立公園部に入省し、中部山岳国立公園立山・室堂地区上高地地区、阿蘇国立公園九州地区等の駐在管理員を経て、総理府公害等調整委員会に出身したのち、1972年には山形県立公園平、阿蘇、瀬戸内海の各国立公園の管理事務所長を歴任したのち、1988年に環境庁を退官し、近畿日本鉄道株式会社企画室に9年間務めました。1998年に自然ふれあい舎を立ち上げ、今日まで自然ふれあいトレッキングを主宰して、100人を超える仲間たちと国内外の山々を元気に登っています。</p>
写真・図表2-23	転落事故3日後の『信濃毎日新聞』 1955年1月5日	<p>翌6日の『毎日新聞』（長野版）には、毎日新聞本社の竹節作太運動部長のコメントが掲載されました。竹節は、日本製ナイロンザイルは優秀であり、「前穂高岳で三重大の若山君が遭難した直接原因を日本製ナイロン・ザイルの弱さになすりつけてとやかくいっている者もあるが、これははなはだ早計である。」としました。また、「若山君の場合はどんな具合に切れたのか判らないが、もし岩の角で切れたとしたらザイルさばきが下手であったことになるし、使い古したか、細過ぎたザイルを使ったのであら不注意ということになる。」とも語っています。</p>
写真・図表2-3	自宅での木製架台による実験措置 1955年1月中旬～	<p>現地からもとった石岡は、1月中旬から名古屋市の自宅で小規模な実験にとりかかりました。この写真は、その際に石岡が製作した実験用の木製架台です。エッジを付けた台の上にザイル上端を結んで固定し、他の端におもりの石を結んで、その石を落下させるといふ実験でした。その結果、五則が使っていたものと同じ直径8mmのナイロンザイルは、わずか15kg余りの石の、高さ60～70cmの落下ですら、エッジ部分で切断することが分かったのです。</p>

写真・図表 2-4	篠田重治（しのだ・ぐんじ、1904-1990）	1904 年、現在の千葉県船橋市に生まれ、官立松本高等学校を経て、1923 年に京都帝国大学理学部物理学科へ入学、X 線結晶学を学びました。卒業後は工学部冶金学科の大学院に進学し、X 線解析の金属への応用を研究、1929 年に官立大阪工業大学助教授、1939 年には大阪帝国大学工学部精密工学科教授に就任しました。応用物理学会会長、日本学術会議議員などを歴任し、1967 年に大阪大学を退官、名誉教授となりました。また、松本高校時代から登山を始め、1947 年には日本山岳会関西支部長、1949 年には大阪大学山岳部の設立に尽力してその初代部長に就任するなど、関西山岳界の重鎮でもありました。ナイロンザイル事件が起こった 1955 年頃も現役の登山家として活動しており、とくに 1961 年と 1963 年には、大阪大学によるヒマラヤ P（ピーク）29 峰登山隊長を務めました。1989 年には日本山岳会名誉会員となりました。
写真・図表 2-5-1	蒲郡公開実験の装置全体（左）と実験岩角（右）	岩角のアツク写真を見ると、角に丸みが付いているように見えなくもありませんが、見学者たちは装置の下から見えていたため、肉眼では気づきませんでした。しかし石岡は、実験結果を聴いた瞬間に岩角への細工に思い当たったと回想しています。そして、篠田らの話を信じて、実験に立ち会わなかったことをのちのちまで悔いることになりました。
写真・図表 2-5-2	同上	同上
写真・図表 2-5-3	蒲郡実験を報じる『中部日本新聞』（現在の『中日新聞』）1955 年 5 月 1 日	『中部日本新聞』は、それまで石岡らにどちらかといえば好意的な報道をしていましたが、この記事では論調が一変しています。そして、「東條氏の事故もエッジ上の衝撃という想像の原因は影が薄くなったようだ」と、石岡の説は想像であると切り捨てました。石岡は、実験を報ずる新聞を見て、「この実験はインチキだ！手品だ！」と叫んでいたと回想しています。石岡は、この新聞記事の貼られているスクラップブックに、「ナイロン・ザイル事件、ここに発生する。」と書きました。事故が事件になった瞬間でした。

写真・図表2-6-1	奥又白谷B沢を降ろされる若山五朗の遺体(1955年8月3日)	春を待つて、4月下旬から5月上旬にかけて、岩稜会、三重大学山岳部、津島高校山岳部などによる大規模な若山五朗の捜索がおこなわれましたが、発見することができませんでした。その後も捜索は継続し、ようやくB沢上部で遺体が発見されたのは、7月31日のことでした。ヘリコプターがほとんど普及していないかった当時、遺体を降ろすことは困難をきわめました。8月3日、10数人がかりで松高ルンゼまで遺体を運び、檢視の後、野外において火葬しました。小説『氷壁』にも、この山中での火葬の場面が印象的に描かれています。
写真・図表2-6-2	若山五朗の遺体に結ばれていた、切れたナイロンザイル 1955年8月	若山五朗の遺体の発見は、その生死の確認、遺族や関係者の心情的な問題はもちろんです。ナイロンザイル事件の証人という点でも重要な意味を持っています。転落の原因についてはさまざまな臆測もありましたが、少なくともナイロンザイルが切断したことによって転落したことは明らかとなりました。あとは、なぜ切断したのかという問題でした。
写真・図表2-6-3	切断した強力8ミリナイロンザイルの切断部分	
写真・図表2-7-1	鈴鹿市での松の木実験 1955年9月1日	石岡は、遭難現場の調査によって事故の正確な再現が可能になったことをうけて、鈴鹿市の神戸城跡で岩稜会員とともに再検証実験をおこないました。松の巨木の枝に遭難現場の岩角に似た岩石を固定し、それを支点として、五朗の体重とほぼ同じ60kgの砂袋のおもりを落下させるというものです。その結果、ナイロンザイルは落下距離50cmでもあつげなく切断したのに対し、麻ザイルは落下距離1mでも三つ撚りの1本が切れただけでした。この実験の結果は、1956年12月の『岳人』に石岡繁雄「ナイロン・ザイルの強度 下」として報告されています。
写真・図表2-7-2	同上	同上
写真・図表2-7-3	墜落前後の若山と岩角支点との位置関係	※観覧者に事故発生時の状況をイメージしてもらう目的で掲示した。展示ケース2-7にも同じものを添えた。
写真・図表2-8-1	石原國利告訴状(抜粋) 1956年6月22日付	※告訴状の一部を、活字に打ち直したものの。



写真・図表 2-8-2	篠田軍治が告訴されたことを報道する『中部日本新聞』1956年6月24日	多くの新聞がこの告訴を大きく報道しました。篠田はこれに對し、すでに1955年10月の学会において、ナイロンザイルが鋭角に弱いということはすでに発表済みであるとコメントしています。しかしこの学会報告は、石岡が主張する、ナイロンザイルの決定的弱点は鋭角のクサビ効果に對する弱さであるという論点には全くふれず、もっぱら摩擦熱を切断の理由に挙げて、実験岩角の鋭さが問われている蒲田実験から話をそらそうとするものでした。
写真・図表 2-8-3	ケルンに事件解決を誓う 1956年8月3日	若山五朗の遺体発見から1年後、岩稜会は遺体を火葬した場所にケルン(塚本)に積まれた石積みをつくり慰霊碑し、8月3日にその除幕式がおこなわれました。岩稜会や石岡家の人々は、ナイロンザイルはそれ自身の欠陥のために切れたという事実を、どのような抵抗があろうとも明らかにすること、ケルンを前に誓い合いました。
写真・図表 2-9-1	「氷壁」第76話のスクラップ(井上靖のサイン入り) 1957年2月8日	連載76回にして、初めて「ナイロンザイル」という言葉が登場しました。これを石岡は強い感慨をもって受けとめ、記事をスクラップアツクに貼り付けました。この回は、転落事故でザイルパートナーの小坂乙彦を亡くしたばかりの主人公魚津恭太が、東京へ帰る電車の中で、ナイロンザイルが切れたという魚津の証言に疑問を呈する新聞記事を読む場面です。
写真・図表 2-9-2	井上 靖 (いのうえ やすし、1907-1991) 井上靖文学館提供	昭和時代後期の小説家。現在の北海道旭川市にて、軍医の長男として生まれました。沼津中学校、第四高等学校(金沢)をへて、九州帝国大学文学部英文学科に入学しましたが、京都帝国大学文学部哲学科(美学専攻)に転じて、1936(昭和11)年に卒業しました。卒業後、毎日新聞社大阪本社に入社し、新聞記者として15年間をすごしました。戦後になつて詩や小説の創作活動に没頭するようになり、1950年、43歳の時に『蘭子』で芥川賞を受賞し、人気作家の仲間入りをしました。以後、中間小説と呼ばれた物語作品を量産しましたが、その代表が『氷壁』です。やがて『天平の甕』や『風濤』、『風林火山』などの歴史小説を多く発表するようになりました。そのほか、自伝『しろばんば』をはじめとする私小説的作品や短編小説にも名作が多くあります。1976年に文化勲章を受けました。
写真・図表 2-9-3	井上靖を開んで 1968年12月	井上靖が講演会で鈴鹿市を訪れた時のものです。井上は、『氷壁』を書くにあたって、石原國利や石岡繁雄、岩稜会の人々を熱心に取材しました。また石岡繁雄も、さまざまな資料を井上に提供して自分たちの思いを伝えました。

写真・図表 2-10-1	第1回公開質問状（抜粋） 1958年2月22日	※公開質問状の一部を、活字に打ち直したものの。
写真・図表 2-10-2	石岡・岩後会側の主張を支持する論調となった『中部日本新聞』 1958年4月3日	第1回公開質問状からまもなくして、『中部日本新聞』（現在の中日新聞）において、蒲郡実験の結果に疑問を呈して、ナイロンサイルの欠陥に注意をうながす記事が掲載されました。この記事は、蒲郡実験の翌日に石岡らの主張を「想像」と評した同じ記者が書いたものでした。石岡はこの記事を、告訴が不起訴になった後の流れを大きく変える記念すべきことであると評価しています。
写真・図表 2-12-1	サイルの切断による山岳事故 (1954-1980)	ナイロンのほか、テリレン、テトロン、ポリプロピレンも合成繊維です。 ※は項目内容が不明であることを示しています。
写真・図表 2-12-2	ナイロン・サイル事件の論争が再びはじまったことを報じる『朝日新聞』 1972年6月18日	
写真・図表 2-13-1	鈴鹿高等工業専門学校での公開実験 1973年3月11日	
写真・図表 2-13-2	同上	
写真・図表 2-13-3	同上	
写真・図表 2-13-4	公開実験でサイルが切断する瞬間の超高速度撮影写真 日本山岳協会撮影	
写真・図表 2-13-5	公開実験の結果を報ずる『朝日新聞』	
写真・図表 2-13-6	公開実験の結果を報ずる『読売新聞』	
写真・図表 2-14-1	『朝日新聞』大阪版 1975年4月11日期刊	

写真・図表 2-14-2	安全基準が掲載された『官報』 14527号 1975年6月7日	通産省は、最初は鈴鹿高専の実験装置を用い、のちにこれを元にした本格的な装置を通産省神戸検査所に設置して、安全基準の制定作業を進めた。そして、『通商産業省関係特定製品の安全基準等に関する省令』（昭和四十九年通商産業省令第十八号）の一部を改正する通商産業省令第五十五号として、サイルの安全基準が定められたのです。基準は多岐にわたりますが、たとえば基準を満たしているかどうかを確認する落下衝撃試験の設備には、支点となるものの角を90度として面取りをほどきないことが明記されました。
写真・図表 2-15	1956年版『山日記』の訂正と、誤りを記載したことと謝罪が実現したこととを報ずる『朝日新聞』 1976年12月9日	
写真・図表 2-16-1	五朗と石岡の母親尾のケルン墓参を報じる『朝日新聞』 1975年11月10日	
写真・図表 2-16-2	五朗のケルンに20年ぶりに事件解決の報告に集まった岩棲会員たち 1975年11月11日	前列右より石原國利、長女梓、敏子夫人、その真後ろに石岡、父繁二の遺影を抱くのが母親尾。
写真・図表 2-16-3	早い時期から石岡を全面的に支持する『名古屋大学新聞』第101号 1958年1月15日	
写真・図表 2-0	【若山五朗の遺体を茶屋に付した場所に作られたケルンの現在の写真】	しようしようと墓石に秋雨降るらん 事件の報告 告ぐ我が身にも 皆むせし墓石流れる雨と酒 いましめじみと事件を報ずる 五朗ちやんよ 安らかに眠れ苔の下 至難の事件いま解決す また来ると墓石に告げて 去らんとす 雨にローソク消えるぞ悲し おしき人あきらめ難きお最後と 多くの教え後に残して（光月） 若き身を深山の雪に花と散り 続く人 等教え残して（ことえ） 五朗ちやんの墓 皆むせし二十年 至難の事件 解決をみし（1975年11月11日のケルン墓参の際に石岡繁雄がつくった詩） ※第2コーナーの最後に、現在のケルンの写真とそのケルンを前に石岡繁雄が作った詩とともに展示した。

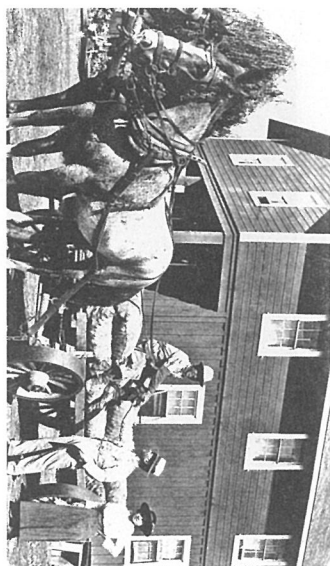
写真・図表 3-1-1	豊田高専時代、学生の卒業研究指導を行なう石岡（左端）（1967年頃）	石岡は、自作のテキストで物理や力学を教えていました。毎年、新入生の授業は山の話から始まったといいます。
写真・図表 3-1-2	鈴鹿高専時代、愛知川遠足で生徒たちと（1975年頃）	山岳教育にも熱心で、学校行事としての登山も多く計画しました。
写真・図表 3-1-3	木曽駒ヶ岳にて、下宿生の新人歓迎ハイキング（1959年）	後列左端が敏子、その隣が繁雄、前列左端が梓、一人置いて抱かれているのがあづみ。
写真・図表 3-1-4	石岡自宅にて、下宿生とのクリスマスパーティー（1959年）	前列右より、繁雄の母・照尾、敏子、繁雄、あづみ・一人置いて梓。石岡は名古屋に住んでいたころ多くの名大生を下宿させ、家族のように世話を焼くとともに、一緒に登山などを楽しみました。
写真・図表 3-2-1	鈴鹿高専で行なったザイルの衝撃（しょうげき）緩衝（かんしょう）装置実験（1972年頃）	冬山用のザイル緩衝装置の実験を、校舎の屋上で、人間の代わりに人形やおもりを使って行いました。
写真・図表 3-2-2	登山時の安全について講義する石岡（1983年）	日本勤労者山岳連盟主催の講演会で「同時登攀中の確保」について講演する石岡。山で実演を交えながら講義することもありました。
写真・図表 3-3-1	発明した避難時用の安全降下具「ハイセーバー」とともに（1990年）	防災フェアに合わせ、品川のマンションで実験したときの写真。高層マンションから降下実験を行いました。
写真・図表 3-3-2	介護補助装置の発明品「バスカー」を試用する石岡（1992年頃）	
写真・図表 3-4-1	研究所でザイルの強度実験を行なう石岡（1991年頃）	
写真・図表 3-4-2	自宅裏の石岡安全研究所（2007年）	高専を退職後も研究を続けるため建設した研究所。ここから多くの発明品が生まれました。

写真・図表 3-5-1	愛知県東海市の消防出初（でぞめ）式レンジャーロープ切断事故について調査する石岡（1976年）	1976（昭和51）年、東海市消防出初式で避難訓練をおこなっていたとき、避難用ロープが切れて署員が墜落（つらく）しました。ケガはなかったものの、再発防止のために、石岡はこの事故の原因を鑑定します。複雑に切れたロープ切断の再現などを試みた結果、丸みがある平らな面でロープを引っ張る力が相当大きく、また繰り返して荷重が加わると、ロープに浅い傷が多数できて突然切断する場合があることを「燃（よ）りロープの縦傷効果」事例として明らかにしました。
写真・図表 3-5-2	「ワールトピアザリア号」のロープ調査を依頼された石岡（左から2番目）（1983年）	1982年に起こった英国タンカー「ワールトピアザリア号」のロープ切断事故について、石岡は調査を依頼されました。詳細は展示品の解説にあります。
写真・図表 3-6-1	『石岡繁雄が語る 氷壁・ナイロン・サイル事件の真実』の編集会議（2006年）	出版社の川角信夫（右端）、共著者の相田武男（右から2番目）、岩後会の藤田壯二（左端）に励まされつつ。これが石岡の最後の著作となりました。
写真・図表 3-6-2	敏子と食事する石岡（2002年頃）	カメラを向けるとVサインで応えるのが晩年の常でした。
写真・図表 3-7-1	名大への寄贈・寄託のための荷造り作業（2012年）	一万点を超えるほとんど全ての整理・登録・保存作業は、「志を伝える会」が5年がかりで行ないました。エプロンなしの蒸し風呂状態の中、梱包作業に追われました。
写真・図表 3-7-2	「石岡繁雄の志を伝える会」の人たちの会合（2010年）	石岡の遺族、豊田高専・鈴鹿高専時代の教え子など、石岡を慕う人は今も後を絶ちません。昼は資料整理、夜は大宴会をして石岡を偲びました。
写真・図表 3-7-3	〔晩年のアツアツ写真〕	
◆「番号」欄…「写真・図表 1-1-1」は、ストーリーパネル 1-1（第1コーナーの1番目のストーリーパネルのこと。ストーリーパネルについては、本文を参照）とともに展示した1番目の写真・図表を意味する。「写真・図表 1-10」「写真・図表 2-0」は、特定のストーリーパネルに付随せず、コーナー全体に関わる写真・図表。全ての番号は、本展示記録に掲載した写真と対応している（一部写真がないものもある）。		
◆「写真・図表名」欄…展示物の名称です。原則として、展示会場でキャプションとして掲示したものだが、（ ）に入れたものは、本記録の作成にあたって付けたもの。		
◆「説明文・備考等」欄…原則として、展示会場で説明文として掲示したもの。ただし、「※」以下の文章は、本記録の作成にあたって付けた備考。		
◆漢字の次の（ ）内にひらがなが入っているのは、実際の展示では漢字の上にひらがなとして入れたもの。		

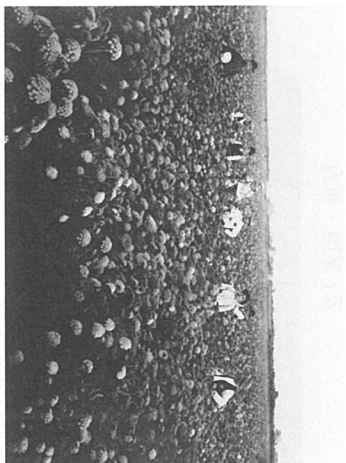




写真・図表 1-0



写真・図表 1-1-1



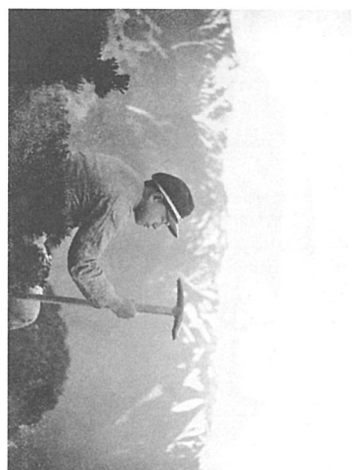
写真・図表 1-1-2



写真・図表 1-1-3



写真・図表 1-2



写真・図表 1-3-1



写真・図表 1-3-2



写真・図表 1-4-1

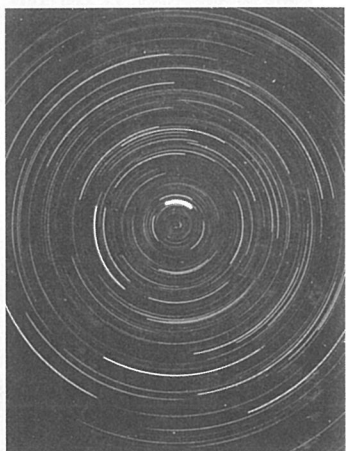




写真・図表 1-4-2



写真・図表 1-4-3



写真・図表 1-4-4



写真・図表 1-5-1



写真・図表 1-5-2



写真・図表 1-6-1



写真・図表 1-6-2



写真・図表 1-6-3



写真・図表 1-7-1



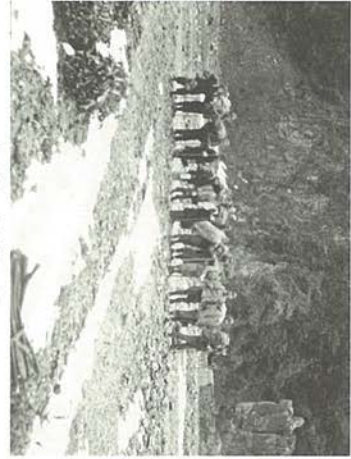
写真・図表 1-7-2



写真・図表 1-8-1



写真・図表 1-8-2



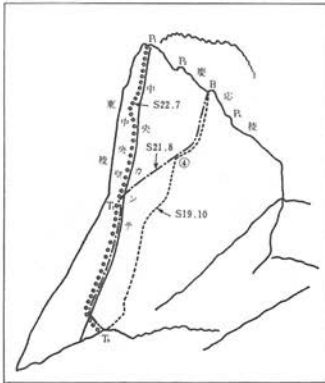
写真・図表 1-9-1



写真・図表 1-9-2



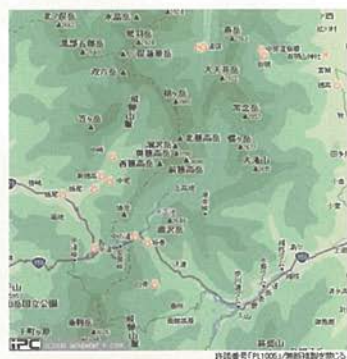
写真・図表 1-10-1



四のガリーから見た屏風岩  
4 図

写真・図表 1-10-2

写真・図表 2-1-1・②



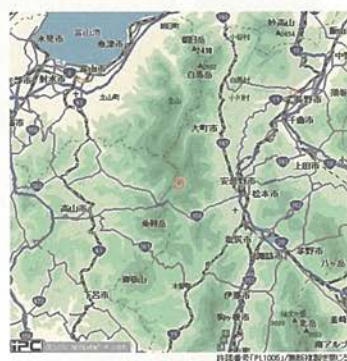
写真・図表 1-10-3

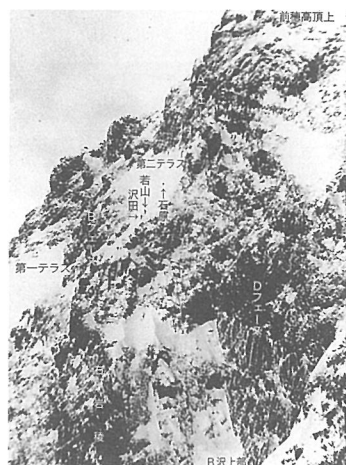


写真・図表 2-1-2



写真・図表 2-1-1・①





写真・図表 2.1.3



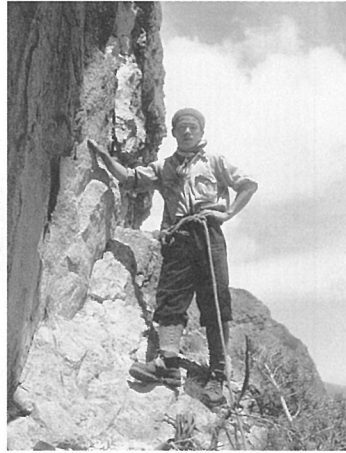
写真・図表 2.1.5



写真・図表 2.1.4



写真・図表 2.2.1



写真・図表 2-2-2



写真・図表 2-3



写真・図表 2-2-3



写真・図表 2-4





写真・図表 2-5-1



写真・図表 2-5-3



写真・図表 2-5-2

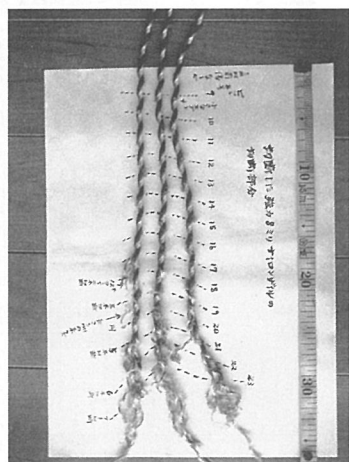


写真・図表 2-6-1

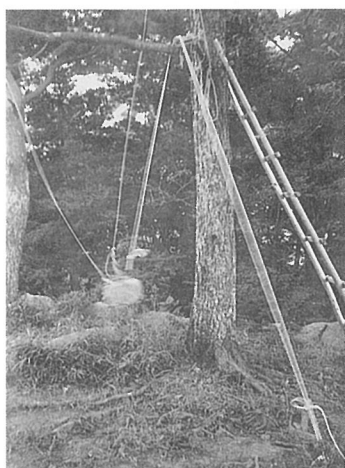




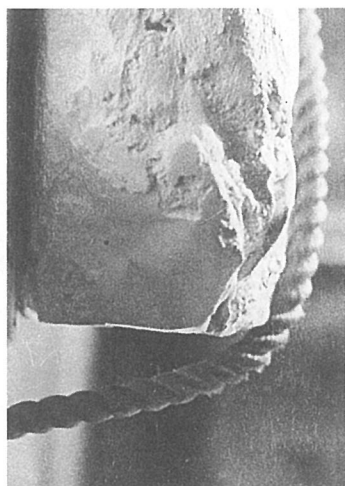
写真・図表 2-6-2



写真・図表 2-6-3



写真・図表 2-7-1

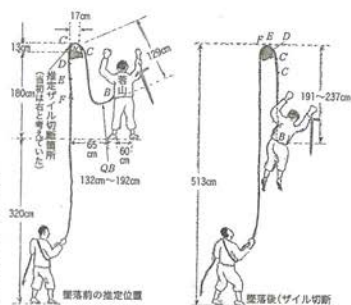


写真・図表 2-7-2

写真・図表 2-8-3



写真・図表 2-7-3



雁死者登山の身長170cm 体重64kg (昭和29年5月の身体検査による)

切断ザイルの全長=388cm  
 $FE = 13.5\text{cm}$ ……切断状態  
 $ED = 15.5\text{cm}$ ……エグシ  
 $DC = 106\text{cm}$ ……ケバ(確保者がザイルを動かしたためのケバを含む模様)  
 $DC = 15\text{cm}$ ないし $30\text{cm}$ ……転落によって出来たケバの長さ  
 間にまいていた部分は $135\text{cm} \sim 180\text{cm}$ と仮定する  
 (結び目の余分を更に一回結んでいた)

1 図 雁落前後の登山と岩角支点との位置関係

写真・図表 2-9-1



写真・図表 2-8-2





写真·图表 2-9-2



写真·图表 2-10-2



写真·图表 2-9-3

[illegible]

写真·图表2-12-1



写真・図表 2-12-2



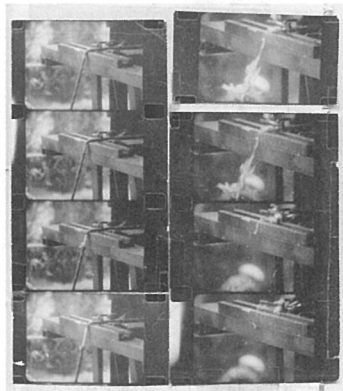
写真・図表 2-13-2



写真・図表 2-13-1



写真・図表 2-13-3



写真・図表 2134



写真・図表 2136



写真・図表 2135



写真・図表 2141





写真・図表 2-15



写真・図表 2-16-3



写真・図表 2-16-1



写真・図表 2-0





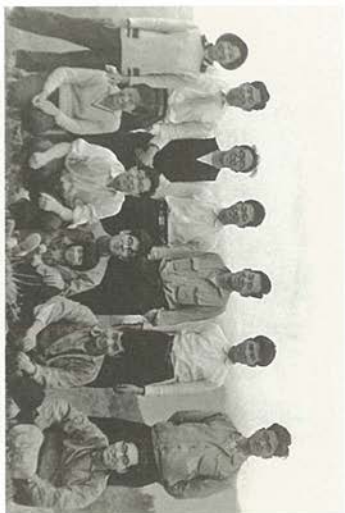




写真・図表 3-1-1



写真・図表 3-1-2



写真・図表 3-1-3



写真・図表 3-1-4



写真・図表 3-2-1



写真・図表 3-2-2



写真・図表 3-3-1



写真・図表 3-3-2



写真・図表 3-4-1



写真・図表 3-4-2



写真・図表 3-5-1



写真・図表 3-5-2



写真・図表 3-6-1



写真・図表 3-6-2



写真・図表 3-7-1



写真・図表 3-7-2





写真・図表 3-7-3



物品・資料展示物等一覧（展示パネルは除く）

番号	展示品名	第1コーナー	説明文・備考等
ケース1-1-①	水筒	石岡が愛用した山道具	
ケース1-1-①	サンデラス	石岡が愛用した山道具	
ケース1-1-①	ハーモニカ	石岡が愛用した山道具	
ケース1-1-①	アイゼン	石岡が愛用した山道具、※袋も展示	
ケース1-1-②	計算尺	石岡が愛用した山道具	
ケース1-1-②	カメラ (ミノルタ製蛇腹式)	石岡が愛用した山道具	
ケース1-1-②	バッジ類	日本山岳会会員バッジ、日本山岳会東海支部ネクタイピン、鈴鹿高校山岳部員バッジ、三重県立神戸中学山岳部部員バッジ、岩後会会員バッジ、愛知県山岳連盟・山岳雑誌岳人・中部日本新聞社主催の登山教室夏山総合講座記念バッグル	
ケース1-2-①	海軍時代につづったノート (1942年頃)	合宿生活などの記録がスケッチとともに記されています。	
ケース1-2-①	敏子の思い出を集めたスクラップブック	左は繁雄18歳、敏子8歳の写真。右上の切り抜きは、敏子がわずか13歳で槍ヶ岳の小槍を登頂したときの新聞記事。	
ケース1-2-②	中学二年生のときのノート (1933年頃)	海産生物から昆虫まで、さまざまな動物を詳しく描いて勉強していた様子が見えます。	
ケース1-2-③	八高山岳部発行「山稜会誌別冊」に載った石岡の文章 (1939年)	本宮駒逆縦走（本宮駒～宝剣岳）のときに感じたリーダーの資質について、考察しています。	
その他1-1	繁雄と敏子が着ていた登山服	服は繁雄60歳、敏子50歳頃のもの（一部、他者のものを使用） 繁雄は靴下が不ぞろいでも気にしなかった 繁雄のビッケル：若山五朗存命の頃のもの 敏子のビッケル：今西銅司らが発足した十二支会から還暦祝いとして繁雄がもらったもの サック（キスリンダ）：戦争直後の頃のもの	
その他1-2	石岡が海軍時代に着た軍服 (1943年頃)	軍刀は鞘のみで刀は入っていません。	

ハンスオン 1	[石岡繁雄のトライベート関係]	「石岡さんちの繁雄君と敏子ちゃん T71.25～H18.25」「バックカスの思い出 岩稜会 S20～」 ※展示しきれなかった写真等をラミネート加工して綴じたもの。 ※掲載写真なし。
ケース 1-3	航空写真を立体視する器具	『越前の岩場』を作るために購入した器具で、山へ持って行って見たこともあるそうです。右・左のレンズをそれぞれ右・左眼で覗きこみ、オレンジと緑の△が重なって見えるところを探してください（レンズを上下させる場合は、これがないようにあつかってください）。写真が立体に見えるようになります。
ケース 1-4	育英会奨学金について発表した冊子『奨学生の推薦基準について』（1954年）	石岡は名古屋大学に勤務していたとき、日本育英会の奨学金について検討します。戦後の貧しい学生たちが奨学金を求めて殺到するなか、彼はどの学生を採用するかを決める合理的な採用基準（推薦基準）を、深く考察した上で提案しました。この基準は高く評価され、石岡はこれについて各地で講演します。日本育英会からは後に感謝状が贈られました。冊子の終わりに書かれた「あとがき」の文章からは「採用が正しく行われないうときは、もっとも純粹であるべき学生の胸中に『社会とは正直者が馬鹿をみるところだ。』という觀念を植えつけてしまうことになる。」など、公平な推薦基準をめざして彼が真剣にとりくんでいた姿勢がうかがえます。
ケース 1-4	冊子作成時の考察ノート（1963年）	同上
その他 1-3	育英会からの感謝状（1963年）	同上
ケース 1-5-①	『屏風岩登攀記』（初版（1949年）、再版（1974年）、文庫版（1980年）、直筆サイン入り限定版（1977年）、復刻版（2007年））	『屏風岩初登攀をめぐる人間関係やその葛藤（かつとう）などを、石岡は『屏風岩登攀記』に書き残しています。この本は、初版ではふれなかった初登攀の軌跡（あつれき）が再版によって直袒され、戦前・戦後の登山事情はもちろん、石岡繁雄の山や仲間に対するありのままの心情が表現された名著で、文庫本化もされ、今も読みつがれています。
ケース 1-5-②	屏風岩登攀で命を救ったナスカン	1946年に試みた登攀では、石岡とザイルで結ばれていた武藤が20メートルほど落下します。しかし、武藤は無傷でした。ナスカンのくびれたところからザイルが食い込むことで、ザイルが摩擦（まさつ）しなから伸びてしまったため、落下の衝撃が軽くなりました。この経験から、石岡は後にザイルの切断防止装置を発明します。



ケース1-5-②	屏風岩でつづったと思われる メモ (1947年)	屏風岩でひとり取り残され、救助を待つ間に書かれたものと思われます。死も覚悟していた心境がうかがえます。(もし、救助がこないとしたとき、如何にしてここを脱出すべきかということを考えてみた。その可能性のないことを心の底で願いつつも約二十米の細引、三ヶのカラベナ、九本のハーケンがその道具であり、これまでの経験によるこの岩壁への知識、殆ど完壁に暗記されている。丁度、詰将棋に於ける「持ごま」と根譜とをみくらべののににしていた。このことを考えることは非常に恐ろしいことである。脱出の可能性をみつけるのではないか。不可能だということを私自身になっとくさせることが出来ないことを恐れる。)
ケース1-6-①	岩稜会が出版した『穂高の岩場(Ⅰ)、(Ⅱ)』(1959,60年)と『岩稜』(1987年)	
ケース1-6-①	名大山岳部と岩稜会によるヒ ブラヤ遠征計画書 (1957年)	実現できなかったものの、岩稜会はヒブラヤ遠征などを精力的に計画しました。メンバーの中には、他の隊に招かれて海外遠征隊に参加したものでいました。
ケース1-6-①	『社会体育優良団体』として文 部大臣より岩稜会に贈られた 表彰額 (1978年)	
ケース1-6-②	〔ヒブラヤ山脈地図〕	※展示中において劣化が見られたため、1月10日の14時をもって、展示ケースから取り除いた。
その他1-4	『社会体育優良団体』として文 部大臣より岩稜会に贈られた 表彰状 (1978年)	
その他1-5	ビデオ『屏風岩登攀記』	河合義久制作 (2013年) 58分 (63分の完全版より一部抽出したもの) 石岡繁雄の著書『屏風岩登攀記』を元に、初登攀に至るまでの過程や葛藤を写真や図の資料で再現したビデオ。※掲載写真なし。
ケース2-1-①	岩稜会「1955年1月 奥又合 宿備忘録」	岩山五朗らの遭難を知った石岡繁雄は、1月3日には現地に入りました。そして翌4日に石原國利と澤田榮介が救助され、五朗の転落事故と行方不明を知ることになりました。「パッサカス」とは石岡繁雄のことです。

第2コーナー

ケース 2-1. ②	石岡らが上高地で作成した報告書原稿 1955年1月7日	石岡繁雄の走り書きの草稿を、石原國利が清書した原稿です。多くの訂正が入っていますが、これは石原の清書に、さらに石岡が手を入れたものです。石岡は、木村小屋（上高地帝国ホテルが管理する冬期山小屋）の主人から、五期峠の落の4日前にも、前穂高の近くの明神岳五峰で、ナイロンサイルの切断による転落事故で重傷を負ったことを知ります。さっそうと石岡は、木村小屋でナタを使った簡単な実験をおこないますが、ナイロンサイルが麻サイルに比べて簡単に切れてしまいました。早くも石岡は、事故がナイロンサイルの欠陥によるものではないかとの疑いをいだくのです。
ケース 2-1. ③	石岡繁雄「切れたナイロンサイル 世にも不思議な出来事」(『岳人』第83号)	石岡らが事件直後に上高地で作成した報告書を、一部加筆のうえ活字化したものです。ナイロンサイルが登山用ロープとして重大な欠陥を持ち、そのために犠牲者が出たのではないかという仮説は、山岳界に大きな衝撃を与えました。
ケース 2-2. ①	石岡繁雄宛木下是雄書簡 (1955年1月24日)	当時学習院大学理学部教授であり登山家でもあった木下是雄からの書簡。ナイロンサイルが鋭い角に弱いという石岡の見解に疑問を呈しています。書簡中の×印は、石岡が木下の誤っている部分に付けたものです。木下が「以下に述べる見解はかなり篠田さんの影響が入っているものとお考え下さい。」と書いているように、篠田は当初よりナイロンサイルの欠陥に否定的であったことが分かります。しかしその後、4月24日に石岡らと対面した篠田は、東京製綱からの研究依頼によりその資金で研究をしているが、実験結果は石岡らに有利になることはあっても、メーカー側に有利になることは絶対はない旨を発言しています。なお木下は、その後石岡宅を訪れて木製架台実験を目的の当たりにして、石岡の説を支持するようになりました。

ケース 2-2-②	石岡 繁雄宛 篠田 軍治 書簡 1955 年 12 月 19 日 [拡大複製]	1955 年 11 月 18 日、石岡は岩後会副会長の伊藤経男、澤田榮介の父親と 3 人で大阪大学を訪問し、篠田と面談しました。この時篠田は、9 月 1 日の松の木実験の報告書は正しいこと、蒲郡実験を報じた新聞の記事や、事故の原因を遭難者側の初歩的ミスや指導者の無知に求めた雑誌の記事は誤りであることを認めました。そしてその場では蒲郡実験の誤りを公表するつもりで了承しました。しかし 1 ヶ月後のこの書簡では、蒲郡実験の是非について全くふれていません。ナイロンザイルならどのメーカーの製品でもあの事故は避けられなかった。たので、製品としての欠陥はなく、したがって東京製綱の責任を問うことはできないなどと、あたかも部外者のような立場から、1 ヶ月前の会見とは全くかみ合わない内容を送って来ています。※メモ 2 枚目の複製を添えた。
ケース 2-2-③	名古屋大学工学部におけるザイル引っ張り実験のメモ 1955 年 1 年 30 日～31 日	本製架台実験の結果に自信を深めた石岡は、名古屋大学工学部において、須賀太郎教授（応用物理学講座）の指導の下、指で押して痛い程度の鉄製の三角エンジにザイルをかけて引っ張る実験をおこない、やはり五明が遭難した条件ではナイロンザイルは容易に切断するという結果を得ました。もはや石岡らにとつて、この鳴り物入りで販売されている直径 8mm のナイロンザイルの欠陥によって転落事故が起こったことは明白でした。※メモ 2 枚目の複製を添えた。
ケース 2-2-④	登山用ナイロンザイル（直径 8 mm、東京製綱製）	若山五明が事故の際に身に着けていたナイロンザイルと同じ製品です。当時、ナイロンザイルは、麻ザイルよりも軽くてかさばらず、しかもこれまでの麻ザイルよりも強いというふれこみで、登山家たちの注目を集めていました。1955 年 3 月上旬、愛知県津島市の昭和紡織株式会社（繁雄・五明の実父若山繁二が重役を務める）において、五明の遺族である若山繁二とメーカー側（ザイルメーカーの東京製綱とザイルの材料であるナイロンメーカーの東洋レーヨンなど）との 2 回目の会見がありました。1 月 31 日の 1 回目の会見では、メーカー側から謝罪とナイロンザイルの欠陥を認める発言がありましたが、この時には態度が一変し、メーカー側にとつても営業上の損害をこうむった災難であり、事故の原因はザイルではなく、取り扱いが悪かったからであると発言、会見は決裂しました。※1 月 21 日以降はケース 2-2-8 で展示。

ケース 2-3-①	「ナイロンゼイルはもうなるか」(『山と溪谷』第193号) 1955年7月	中京山岳会の副会長であった熊澤友三郎は、今回の転落事故は、「ゼイルに對する知識の不知識が表面化したものです。つまり指導者があまりにも、ゼイル知識を知らなすぎたと言えます。」と断言しました。実は、彼は切斷したゼイルを右側に販売した人物でした。※重要ページを複製して添えた。
ケース 2-3-②	関根吉郎「山」(『化学』1955年7月号)の岩稜会ハーナイ批判	当時早稲田大学理工学部助教授にして日本山岳会理事であった関根吉郎の文章です。関根は、ナイロンの柔軟性は冬の越高程度の寒さでは全く阻害されず、登山用ロープとしては理想的であるとしたうえで、岩稜会の3人はクラランゼン(アイゼン)の爪でゼイルを損傷するという、初心者にありろで起った失敗であるから、当事者は出来るだけ、罪をナイロンに帰せようとする気持もわかるが」などと言っています。※表紙を複製して添えた。
ケース 2-3-③	山崎安治・近藤等編『積雪期登山』(朋文堂) 1955年11月	蒲郡実験の半年後に刊行された、積雪期登山の基本的技術を1冊にまとめた本です。執筆者のほとんどが、日本山岳会の理事や会員でした。ナイロンゼイルについて、「性質は石表の如く重さ、強度、耐湿何れの点からいっても非の打ちどころが無いはずである。」と断言しています。早くも1年後には再版されており、多くの登山者に読まれたものと考えられます。
ケース 2-3-④	1956年版『山日記』 1956年1月 相田武男氏所蔵	『山日記』は、日本山岳会が1930年から刊行してきた、登山にあたっての留意事項や基本的な情報を一通り記した、当時の登山者に広く普及していたハンドブックです。その1956年版で、篠田は「山の装備」の項目の執筆を担当しました。ここで篠田は、墜落などの衝撃に對するゼイルの強度について、蒲郡実験のデータを引用して、ナイロンの方がマニラ麻より4倍以上の強度を持っていると記しています。
ケース 2-4	1955年3月から10月にかけて実験ノートと松の木実験の記録	

ケース 2-5	加藤富雄「岩登りに於けるザイロの破断とその対策について」(『睡学園鉅著会記録』第2号) 1955年7月20日	三重県山岳連盟の加藤富雄は、蒲郡実験に出席した帰りに、東洋レーヨンの2人の社員から、同社で篠田がおこなった実験では、ナイロンザイルは弱いという結果が出ていたことを知ります。右図は、五郎の遺体を火葬した翌日に加藤からこの話を聞いた時、その手を握って感謝したといえます。この加藤の論文は、蒲郡実験の結果と東洋レーヨンの社員から入手したデータを比較して、蒲郡実験の岩角には丸みが付けられていたことについて論じたものです。
ケース 2-6	岩稜会「ナイロン・ザイル事件」1956年7月	310ページにおよぶ事件の解説書です。わら半紙に謄写版印刷したもので、150部刷られて石岡の知人や報道機関、山岳関係者などに配付されました。事件に関する重要な事項や資料が全て収録されており、今なお事件初期の状態を伝える基本文献です。※冒頭宣言文の全文を活字に打ち直して展示冊子に添えた。※聞いているのは複製本。
ケース 2-7-①	遭難現場の岩角を聖取った石膏 市立大町山岳博物館所蔵	検証実験で現場の条件を正確に再現するため、ザイルを切断した岩角から石膏で型を取ったものです。※展示は11月8日～。11月5日～7日は、名古屋大学博物館所蔵の縮小複製を展示した。
ケース 2-7-②	再検証実験(1955年9月1日)に使用された岩石 市立大町山岳博物館所蔵	遭難現場の岩角の石膏に類似した岩石をさがして、鈴鹿市での再検証実験(松の木実験)に用いました。この岩角は60年以上経過しているため、多少鋭角さを失っています。※展示は11月8日～。
ケース 2-7-③	遭難現場の写真と岩角のスケッチ 1955年8月6日	写真は、1955年8月6日の調査の際に撮影したものです。橋円で開った部分が、滑落直前の若山五郎の足場、×印がザイルを切断した岩角です。スケッチも、同じ調査に基づいています。調査の結果、右の図のような岩角の支点との位置関係で五郎が転落したことが分かりました。※スケッチと写真は資料の構造上同時には見せられないので、写真はスキャンしたものを添えた。また、事故発生当時の状況図も添えた。
ケース 2-8-①	岩角に付着していたナイロンザイル切片 市立大町山岳博物館所蔵	1955年8月6日、石原一郎(國利の兄、五郎が遭難した時、現地で登山隊の指揮をとっていた)、石原國利、澤田榮介ら6人の調査により、ザイルの切断現場を特定しました。このナイロンザイルの切片は、ザイルを切断した岩角に付着していたものです。※展示は11月8日～。
ケース 2-8-②	若山五郎の遺体に結ばれていたナイロンザイル 市立大町山岳博物館所蔵	※展示は11月8日～1月17日。1月21日以降は、ケース2-2から「登山用ナイロンザイル(直径8mm、東京製綱製)」(若山五郎の遺体に結ばれていたものを同じ製品)を移動して展示。

ケース 2-8-③	若山五朗の遺体が覆いていたアイゼン（氷雪の上を安全に歩くために登山靴の底部につける金属製の足爪）市立大町山岳博物館所蔵	※展示は 11 月 8 日～。
ケース 2-8-④	村井 葵 「前号『ザイロル事故に因する見解』を読んで」（『岩と雪』第 28 号）1972 年 12 月市立大町山岳博物館付属山岳図書資料館所蔵	三重県山岳連盟は、『岩と雪』第 27 号において、登山用ザイロルを販売する業者が、その製品の弱点について明記したものを製品に添付すべきことをあらためて主張しました。この村井葵の文章は、それを支持するものです。なお、この村井は、登山家であるとともにザイロルメーカー東京トップアの社員でもありました。この東京トップアは、すでに 1970 年 8 月に自社工場で実験をおこない、ザイロンザイロルが鋭角での衝撃に耐えてきわめてもろいという結果を新聞に公表していました。※展示は 11 月 8 日～。
ケース 2-9-①	井上靖への書簡（草稿）で『氷壁』のストーリーについて要望する石岡繁雄 1957 年 4 月 1 日	石岡は、『氷壁』の連載を喜びながらも、ストーリーそのものについては少なからず不満を持っていました。井上は、事件が進行中であり、告げにも及んだことも考慮して、転落の原因がザイロンザイロルの切断であることは前提としながらも、メーカーによる公開実験でザイロルが切断しなかったことが、実験への作偽によるものであるという事件の核心部分については全くふれませんでした。思いあまつた石岡は、核心部分を明らかにするストーリーを、井上に提案する書簡を送りました。書簡中の「魚津」は、親友の転落を目の前で見た主人公、「八代」は公開実験の責任者となった、ザイロルの材料であるナイロン原糸のメーカーの専務（工学博士）です。
ケース 2-9-②	井上靖『氷壁』（新潮社、初版本）1957 年 10 月 名古屋大学文学書資料室所蔵	『氷壁』は、1956 年 11 月 24 日から 1957 年 8 月 21 日まで、270 回にわたって『朝日新聞』朝刊に連載されましたが、読者の人気に応じて、連載終了のわずか 2 ヶ月後には単行本が刊行されました。ベストセラーとなつて、井上靖の代表作の 1 つとして評価されています。※函、契（井上靖「氷壁」について）などあり。

ケース 2-9-③	井上靖自筆原稿（「氷壁」自作改題） 井上靖文学館所蔵	ナイロンザイル事件を素材にした「氷壁」ですが、登場人物たちの立場や人間関係は、現実とは全く異なっていますし、石岡繁雄にあたるような人物も登場しません。物語の主題も、ザイル切断の謎よりも、主人公をめぐる恋愛関係にかなり比重がかかっています。また、連載期間がナイロンザイル事件をめぐる論争が進行している真只中であり、訴訟の問題もからんでいたこともあって、事故の原因については明らかにされないまま小説は終わっています。ただ、石原國利に会ってその人柄に打たれた井上は、石原を信用し、原因は謎にしながらも、ザイルが切れたということとは事実として小説に書いています。
ケース 2-9-④	映画『氷壁』（大映、カラー作品、1958年3月公開）のパンフレット 名古屋大学文学書資料室所蔵	このあと、1967年（日本テレビ）、1972年（NHK）、2006年（NHK）と3度にわたってテレビドラマ化されました。
ケース 2-10-①	『週刊朝日』 1957年6月2日号	ついに篠田は、蒲郡実験と五朗の転落事故はもとも無関係なので、批判されるのは迷惑であると発言するようになりました。『週刊朝日』によれば、篠田は「ナイロン・ザイルの強度試験と穂高での遭難は全然無関係だ。遭難者が出たことを実験に結びつけるのは私には迷惑な話だ。実験ではナイロンは切れることもあるし切れないこともある。本当の結論を出すには二、三百年もかかるだろう。」と述べたとされます。
ケース 2-10-②	梶原信男 著・篠田軍治監修 『ザイル 強さと正しい使い方』（日本工業新聞社大阪支社）1959年7月	蒲郡実験について詳しく書かれています。注目されるのは、実験で使った岩角に1mmの面取りをした（丸みを付けた）と、ついに認めたことです。その理由については、面を取らないと実験ごとに角が小さく欠けるため、数百回の実験が同じ条件でおこなえなくなるからだと書かれています。しかし、転落事故を再現するためには、この1mmの面取りはあつてはならないものでした。そして、このわずかな面取りによってナイロンザイルは切断しなくなるのですが、そのことには全く言及がありません。
ケース 2-10-③	ラジオ放送における篠田のコメント 1958年10月22日	第2回公開質問状に対する篠田のコメントがラジオで報道されました。「私の実験は、飛行機や船舶に使うロープの実験の一つとして行ったもので、岩稜会の事故の原因をしらべる為に行ったものでないから、岩稜会の人々の非難は当たらない。」と述べています。その一方で、「ナイロンザイルは既に岩角に弱い事は明らか」と認めています。

ケース 2-11-①	石岡繁雄・岩稜会の東京製綱・篠田軍治への訴え 1955 年 11 月 17 日	
ケース 2-11-②	岩稜会「ナイロンザイル事件に終止符をうつにさいしての声明」 1959 年 8 月 30 日	
ケース 2-11-③	「ナイロンザイル論争果てて」(『アサヒグラフ』 1959.10.4 号)	
ケース 2-12	石岡繁雄「思い出の事件」(『山と仲間』) 1971 年 1 月 1 日	「昭和 47 → 48 にいたる盛りあがりは、すべてここから発生した。！！」という石岡の書き込みが印象的です。※スクラップブックに綴じられているものはコピー。
ケース 2-13-①②	東京製綱の製品に添付されたバンフレット 1973 年 7 月訂正版	1973 年 7 月から、東京製綱のナイロンザイルに添付されるバンフレットが改訂され、その弱点が明記されるようになりました。8mm 以下のナイロンザイルは衝撃や剪断に弱いので、登山にはいつさい用いてはならないこと、9mm のザイルでも、必ず 2 本重ねて用い、岩にザイルを直接かけけることは非常に危険なので絶対にせず、カラビナ（ハーケンとザイルをつなぐための金具）に通して使うこと、などが記されています。※スクラップブックに綴じられているもの（見開き）と、冊子として保存されていたものを両方展示した。
ケース 2-13-③	NHK 総合「スタジオ 102」に出演する石岡繁雄 1975 年 4 月 22 日	※展示期間中において写真に劣化が見られたため、1 月 15 日以降はコピーを展示。
ケース 2-14-①②	1956 年版『山日記』の訂正についての覚書 1976 年 10 月 16 日	日本山岳会からは、『山日記』担当理事の皆川完一と常務理事の近藤信行が署名している。
ケース 2-14-③	1956 年版的篠田の文章の訂正とお詫びについて告知する 1977 年版『山日記』 1976 年 12 月 相田武男氏所蔵	



ケース2-14-④	『岳人』第528号「日本山岳会 の名譽会員問題が火タネ」15 年ぶりに再燃したナイロンザ イル事件」1991年6月	この特集には、編集部による題旨説明および事件の年表のほか、相田武男(朝 日新聞記者)「社会常識から遊離した組織の病巣」と石岡繁雄「蒲郡実験の 虚偽を認め名誉会員を取り消せ」が掲載されています。※スクラップアプ ラに綴じられているものはコピー。※見聞きの右半分は、個人に関する情 報が記載されているため隠した。
その他2-1	ザイル切断実験に使った天然 石	ここに展示した三種の自然石を鉄柱に固定したものは、石岡が鈴鹿高専を 退職後に設立した石岡高所安全研究所で、各種ザイルの岩角での切断実験 に使用したものです。
その他2-2	ビデオ『バックカスの軌跡』	河合義久制作(2013年)66分 石岡の生涯から晩年までを紹介したビデオ。 弟(若山五朗)の遺体発見時や、神戸(かんべ)での実験、鈴鹿高専 での公開実験のフィルムなど、貴重な映像を含む。※掲載写真なし。
その他2-3	石原國利さん特別講演会	11月22日におこなわれた特別講演会のビデオです。事件発生当時の登山 事情や遭難時の状況などを説明しています。(約1時間)※掲載写真なし。
ハンスオン2-1	『ナイロンザイル事件関係アル バム』	※アルバムをカラーコピーし、ラミネート加工したものの。※掲載写真なし。
ハンスオン2-2	〔公開質問状・告訴状関係〕	※石原國利氏による告訴状と篠田軍治への第1回公開質問状をコピーし、 ラミネート加工したものの。※掲載写真なし。
ハンスオン2-3	〔事件概要関係〕	※昭和52年7月「ナイロンザイル事件報告書」全文コピー(ラミネート 加工)、同まえがきコピー(持ち帰り資料)※掲載写真なし。
ハンスオン2-4	「石岡を支えた人々とその思 い」関係／「未解決の日本山 岳会名誉会員問題」関係	※三重県山岳連盟「昭和45年6月14日に発生したナイロンザイル切断につ よる死に事故の責任と、今後同種の事故を防止するために必要な措置につ いての見解」(昭和47年6月)、石岡繁雄「五郎の霊への報告」全文のコピー をラミネート加工したもの(パネルでは一部のみ)／岩後会「日本山岳会 への公開状」(平成6年9月)、「日本山岳会に対する公開質問状の資料」、「篠 田軍治の日本山岳会名誉会員取り消し要望書(公開質問状、石岡繁雄・石 原國利→山田二郎会長、1989年12月19日)」「コピーをラミネート加工し たもの」、「石岡らの要望に対する日本山岳会の回答(日本山岳会会長山田 二郎氏→石岡繁雄・石原國利氏、1990年1月31日)」「コピーをラミネー ト加工したもの)。※掲載写真なし。

ハンスオン2-5	ナイロンザイル事件当時の登山書と現在の登山書の比較	ナイロンザイル事件が起こった頃の登山雑誌と、現在の雑誌は、カラーページが少なく文章が多いです。それと比較すると、現在の本はカラー写真が多く、写真集のようです。手にとって見比べてみてください。※『山と溪谷』第187号（1955年1月）、『山と溪谷』第920号（2011年12月）、西岡一雄・海野治良・諏訪多栄蔵共著『登山 技術と用具』（1954年）、ワシントン・ゲル編集部編『山道具の基本』（2013年）。
ハンスオン2-6	登山用品の進歩	装備 当時のザックと現在のザックに、一泊分の登山道具を入れた重さを再現しました。現在のものは約5.5kg、事件当時のものは約22kgです。【注意】ザックは、大変重いです。持ち上げる際には、十分注意してください。
ハンスオン2-7	麻ザイルとナイロンザイル	※麻製のザイルとナイロン製のザイルを並べて展示。
ハンスオン2-8-①～⑤	安全性実験を再現	石岡さんは、安全のために数々の実験を行いました。中でも、石の角を取り除いたものとそうでないもののザイルの切れやすさを比較する実験は、石岡さんの書かれた本にも詳しく出てきます。実際ロープを使って、右の角があるかどうかでロープの切れ具合が違ってくるかと、ケースの石で試してみましよう。【注意】ケースの中にある石は、するとく、とがっついていきます。ケースの中には、絶対に手を入れないでください。＊実際のザイル切断実験は、石の縁に対して垂直にかけることです。ザイルが切れるかどうかを確かめました。ここでは、ザイルの動き方はちがいますが、面取りしてある場合としていない場合での切れ方について試してもらうのを簡単に体験してもらうようにしてあります。
ハンスオン2-9	石岡が実験に使ったザイル	ザイルはドイツ語で綱・ロープを指しますが、日本では登山用のロープによく使われる言葉です。写真からもわかるように石岡は、登山用はもちろん、じつにさまざまなザイルを実験に使いました。ここに展示してあるものはそのごく一部です。

ケース3-1-①	石岡が開発したビツケル
ケース3-1-②	<p>◆石岡の代表的な発明品1／衝撃時における登山用緩衝装置（特許を得または出願した製品や研究段階で試作した製品） 岩登りなどで墜落（つらい）したとき、その衝撃（しやうげき）により岩角でザイルが切れたり、ハーケンが抜けて登山者が墜死（ついし）する恐れがあります。ザイルが伸びて墜落が止まった場合でも、墜落者の内臓破裂など、大事故につながる恐れがあります。この装置は、過大な衝撃を防ぐために、落下の衝撃エネルギーを、装置内に蓄えられたロープの摩擦（まさつ）で吸収しなから停止させるといふ、石岡の目標が結実したものです。開発の過程で、他のさまざまな特許も生み出されました。◆石岡製作品の推移と特許について 石岡は昭和17年頃の天体望遠鏡製作の頃より機械部品の設計や製作を手掛けていました。初めての特許出願は昭和19年「不足電圧開放器の改良」であり、以後209件の特許を出願し、内47件が認定を受けています。代表的な開発品である「登山用緩衝装置」は、昭和21年、屏風岩の初登攀の偵察登攀の際にザイルバートナーが20m滑落して、その衝撃のために石岡は気を失いましたが、バートナーは無傷でした。その理由が使用していたナスカン（物やザイルを接続するために使用する用具）の、へこみ部分にザイルが食い込んで摩擦しながら伸びていったためでした。そのことからこの装置を思いつき、昭和30年にナイロンザイル事件が切発することには、試作品が完成していました。これをオネスとジョンと呼び、昭和33年に初の特許認定を受けました。以後、次々に改良品を試作するがその過程で登山用としてではなく、高所からの滑落防止などに役立つことを思いつき、昭和58年、避難用下降装置を作り出します。これは後にハイスピードⅢとして市販が予定されることとなります。特徴としては、レバー操作で安全に下降することです。これを分岐点として、登山用・高所避難用の開発を続けるがその過程で、登山用ビツケルや登降器、避難用の締め具なども各種考案します。</p>
ケース3-1-③	<p>登山用緩衝装置の使用例</p>
ケース3-1-③	<p>装置にザイルを通した例</p>
同上	<p>同上、オレンジの帯を腰に付け、青いザイルをビツケルにつなぎ、赤いザイルを腰に差いた別ザイルにつなぎます。※写真では、赤と青のザイルが写っていません。</p>

ケース3-1-③	装着した時の図	同上
その他3-1	ザイルの衝撃緩衝装置の装着例	
ケース3-2-①	高所安全降下具「ハイセーバー」(完成品と製品付属のバシレット)	石岡の代表的な発明品2/ズール火災時などに、高い所からでも安全に避難降下ができる装置で、きびしい審査で知られる日本消防検定協会から「特定避難機器」として認定されました。ハイセーバーは、「世界一強くて小さな緊急脱出用具」と評判になりました。＊この製品は、現在は製造されていません。使用期限があるため、現在販売・所蔵されているものは安全に使用できないおそれがあります。開発されたハイセーバーは、1型が一つのベ式で、複数の人が交互に降りられるように工夫されています。II型は一人用です。いずれも自動で降下する。II型は日本消防検定協会の認可を受けて平成2年に市販にこぎつけれ。しかし価格が高かったため(1台約8万円) 売れず、販売中止となりました。上記と前後しながら、昭和35年には「ばね式自動変速装置」を考案し、豊田自動車(昭和38.39年)、ヤマハ発動機(昭和43年～49年)と提携して開発に取り組みました。昭和37年には通産省より外国特許補助金の交付を受けていますが、製品化とは結び付きませんでした。ハイセーバーを使用して障害者を降下する方法を考えるうち、平成1年頃より障害者のための介護用機器を各種考案するようになります。平成3年には三重県発明くふう展で入賞。以後、平成15年まで介護装置の特許を出し続けています。
ケース3-2-②	ハイセーバーⅠ(1985年)(上)とハイセーバーⅢ(1983年)(下)の降下部品	◆石岡の代表的な発明品2/「ハイセーバーⅢ」は、登山用緩衝装置を開発する中で、高所からの避難用下降装置としても利用できることを思いいつて試作した最初の下降器でした(発明時期は、左隣のケースに展示したハイセーバーが作り出されてゆきます)。
ケース3-2-③～⑤	ばね式自動変速装置(製品の一部)	◆石岡の代表的な発明品3/外からは小さな力しかけるだけで、大きな力を発生させることができるばねの特性を応用した装置。世界各国の特許も取得し、一時は車メーカーからも自動車用自動変速機としても大いに期待されました。海外にも通用する「有用発明」として紹介され、国や県の助成を受けたこともあります。
ケース3-2-③	二重偏心トラソク機構を備えた変速装置	同上

ケース3-2-③	歯車式一方向クランチを装備した無段変速装置	同上
ハンスオン3-1-①②	[石岡繁雄発明品関係]	「今回の遭難事件に関する問題点」の原稿（この原稿は、1961年4月8日に鹿島楢北壁で起こった遭難事件（名古屋大学山岳部員が死亡）について、石岡が論じたものです）、「山岳遭難防止論」の原稿（石岡繁雄による論文・報告書4点）（平成11年度技術改善計画書 平成11年2月18日／登山綱の動的特性と安全装置の研究 1972.4／登山における確保技術の研究 1981.9.15（鈴鹿高専紀要）／遭難用ロープ切断原因の調査・研究（鈴鹿高専紀要））。 ※掲載写真なし。
その他3-2	介護支援装置「ハイナース」(装置の一部である車椅子・垂直昇降装置・使用例の写真)	石岡の代表的な発明品 4 家庭で使える要介護者の支援装置。重度の要介護者にも比較的軽い力で、また上半身が健全な場合はふつう自力で、入浴や排泄（はいせつ）などを可能にする装置です。1) 移動や入浴などのとき体を抱える「ナースシート」、2) ナースシートに乗った要介護者を乗せて移動する「ナースカー」、3) 狭い室内の移動に使える「ローラーナースリフト」、4) 広い室内の移動に使える「リリク型ナースリフト」、5) 敷居（しきい）や石段を越せる「斜面昇降装置」、6) 車椅子などを垂直に上下できる「垂直昇降装置」、7) 自宅階段を小型車椅子を介助者1名によって昇降させることができる「階段昇降装置」、8) 自動車へ乗に移動できる「ナースカーから自動車への移乗装置」の8点からなります。時代を先取りした総合介護システムで、各種の受賞や助成を受けました。
ハンスオン3-2	(有) 石岡高所安全研究所「家庭における要介護者の支援装置について」(平成13年3月)	ハイナースの説明書 ※掲載写真なし。
ケース3-3	英国タンカー「ワールドアザリア号」ロープ切断事故に関する資料（ロープ一本一本に記号をつけて分析した様子がかがえる)	1982（昭和57）年、20万トンのタンカーを岸につなぐロープが切れ、タンカーが漂流（ひょうりゅう）する事故が起きます。このロープ切断の原因について、石岡は鑑定（かんてい）を依頼されます。この事故では、引つぱりの強度が130-150トンもある120mmナイロンクロスロープ2本が、実稼には引つ張る強度30-50トン程度で切れてしまいました。船主と造船会社との間の莫大な損害賠償に関わる重要な鑑定でしたが、石岡の観察は、ロープガイドの設計ミスによってできた傷が原因というものでした。実験なども行われた結果、約1年後には石岡の鑑定が正しかったことが認められ、損害賠償に関しても円満に解決しました。

ハンスオン3-3	[ハンスオンコーナー]	「バツカス会石岡家下宿族S32～H2」「バツカスと豊田高専」「石岡先生との思い出 鈴鹿高専時代S46～S58」「石岡繁雄の一年（ホームベージュから抜粋したスライド集）No.1～3」（石岡の思い出を、家族や山仲間や教え子らが写真アルバムにしたもの＊バツカス会は、石岡家に下宿した人たちの会）、石岡繁雄の著書（『屏風岩登攀記』『石岡繁雄が語る 氷壁・ナイロンザイル事件の真実』『ザイルに導かれて』）、持ち帰り資料（石岡 HP 案内、河合 HP 案内、あるむ社本チラシ、井上靖文学館チラシ、「石岡高所安全研究所の建設」プリント）、石岡が取得した特許（特許証コピー）、芳名帳、観覧者用感想ノート（石岡繁雄の志を伝える会）
ケース-サテ-①	石岡が実験に使ったザイル（写真）	ザイルはドイツ語で綱・ロープを指しますが、日本では登山用のロープによく使われる言葉です。写真からもわかるように石岡は、登山用はもちろん、じつにさまざまなザイルを実験に使いました。※石岡繁雄の紹介として、写真・図表1-0のキャプションを添えた。
ケース-サテ-②	登山用ナイロンザイル（直径8mm、東京製綱製）	※説明文はケース2-2-④と同じ。
ケース-サテ-③	早い時期から石岡を全面的に支持する『名古屋大学新聞』第101号（1958年1月15日）	

- ◆「番号」欄…「ケース1-1-①」は、ケース1-1（第1コーナーの1番目のケース）の中の1番目の展示物という意味する。「その他」はケースに入っていない独立した展示物等「ハンスオン」は観覧者に手に取って見てもらうことを目的とした展示物。「サテ」は、名古屋大学本部1号館玄関でおこなったサチライト展示。全ての番号は、本展示記録に掲載した写真と対応している（一部写真がないものもある）。
- ◆「展示品名」欄…展示物の名称。原則として、展示会場でキャプションとして掲示したものだが、（ ）に入れたものは、本記録の作成にあたって付けたもの。所蔵者名がとくに明記されていないものは、本学の寄贈・寄託された石岡繁雄資料。
- ◆「説明文・備考等」欄…原則として、展示会場で説明文として掲示したもの。ただし、「※」以下の文章は、本記録の作成にあたって付けた備考。
- ◆漢字の次の（ ）内にひらがなが入っているのは、実際の展示では漢字の上にふりがなとして入れたもの。



ケース1-1-①



ケース 1.1-②



ケース 1-2-①



ケース1-2-②

その他 1-2



ケース 1-2 ③



ケース 1-3



その他 1-1







ケース14



その他13



ケース1-5-①



ケース1-5-②



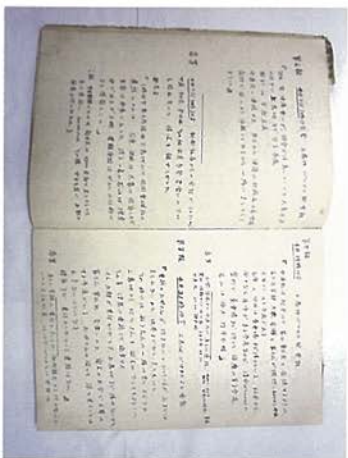
ケース1-6-①



ケース1-6-②



その他1-4



ケース2-1-①



ケース21-②



ケース21-③



ケース22-①



ケース22-②



ケース 2-2-③



ケース 2-3-①



ケース 2-2-④



ケース 2-3-②



ケース23-③



ケース23-④



ケース24



ケース25

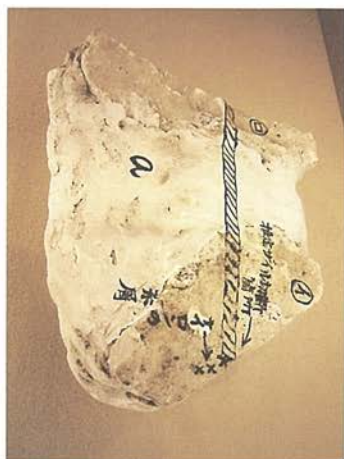




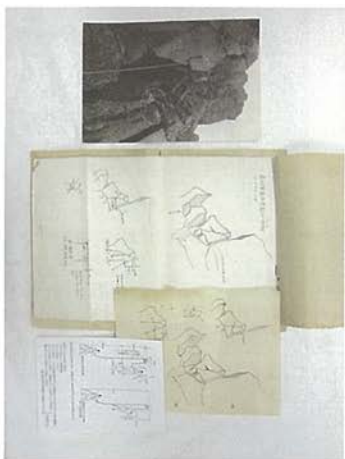
ケース 26



ケース 27-②



ケース 27-①



ケース 27-③

ケース 2-8-③



ケース 2-8-①



ケース 2-8-④



ケース 2-8-②





ケ-ス29-①



ケ-ス29-③



ケ-ス29-②



ケ-ス29-④





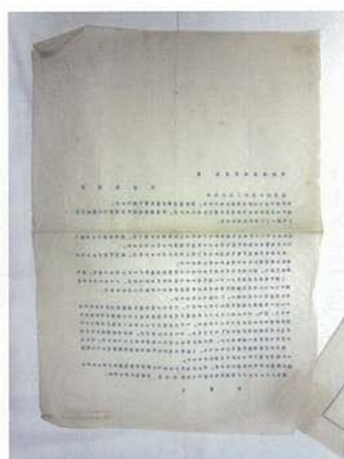
ケーヌ 2-10-①



ケーヌ 2-10-③



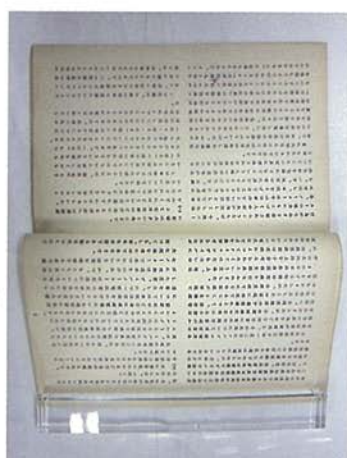
ケーヌ 2-10-②



ケーヌ 2-11-①



ケース 2-12



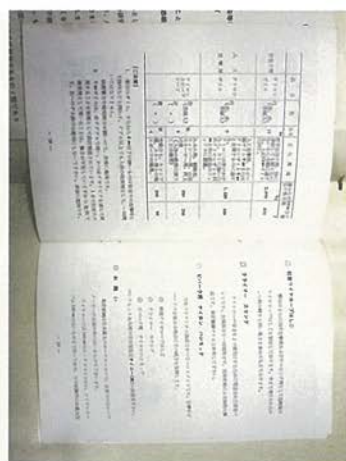
ケース 2-11-②



ケース 2-13-①



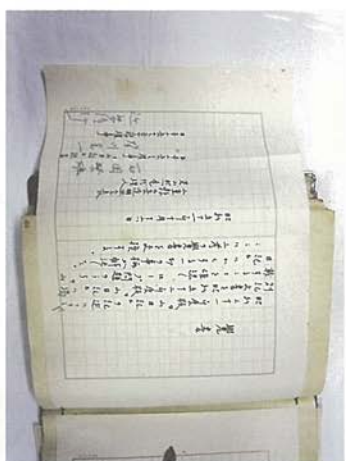
ケース 2-11-③



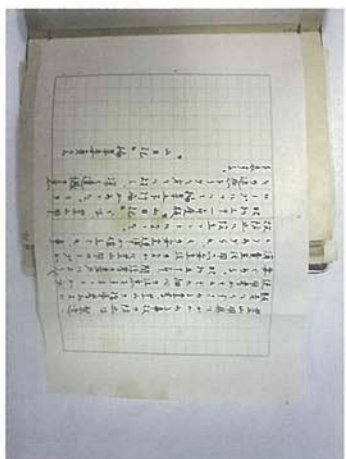
ケース2-13-②



ケース2-13-③



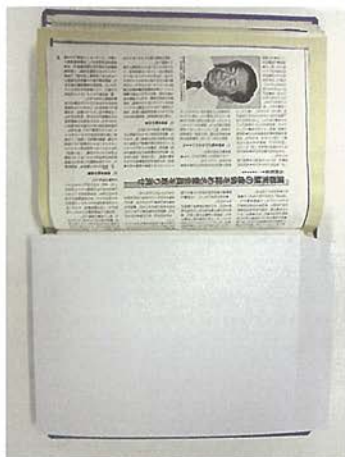
ケース2-14-①



ケース2-14-②



ケース 2-14-③



ケース 2-14-④



その他 2-1



ハズオン 2-5



ハンズオン26



ハンズオン27



ハンズオン28①



ハンズオン28②





ハンスオン28-③



ハンスオン28-⑤



ハンスオン28-④



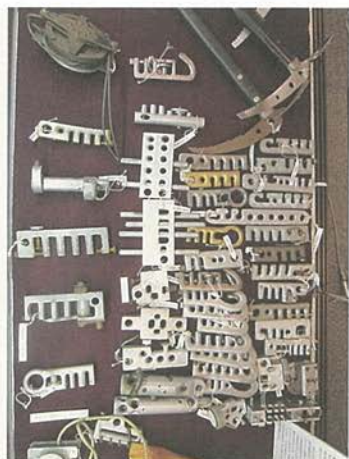
ハンスオン29



ケース 3-1-①



ケース 3-1-③



ケース 3-1-②



その他 3-1-①



その他 3-1-②



ケース 3-2-②



ケース 3-2-①



ケース 3-2-③



その他 3.2



ケース 3.2.④



ケース 3.3



ケース 3.2.⑤





ハンズオン 3.3



名古屋大学  
NM  
博物館

ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯

# 氷壁を越えて

冬の前穂高  
滑落死した弟のザイルは  
本当に安全だったのか

NAGOYA UNIVERSITY MUSEUM 28TH SPECIAL DISPLAY  
Did the Nylon Rope Brake?  
Life of Shigeo Ishioka and His Fight for Safety

名古屋大学博物館 第28回企画展

第28回企画展

2013 TUE 2014 THU

11/5-1/30

入館無料

場所

名古屋大学博物館  
3階企画展示室

開催日

火曜日～土曜日(12月28日[土]～1月6日[月]は休館)

開館時間

10時～16時(入館は15:30まで)

主催

名古屋大学 博物館/大学文書資料室

問い合わせ

Tel: 052-789-5767, Fax: 052-789-5896

特別講演会

〔会場はいずれも名古屋大学博物館3階講義室〕

11/22(土)  
13:30～

「ナイロンザイル事件発生のかきさつ」  
石岡繁雄氏  
ナイロンザイル事件当時の登山「パーティ」リーダー

12/13(金)  
13:30～

「悲しさと懐かしさ、愉快が同居していた石岡さん」  
堀田式典氏  
元朝日新聞記者、石岡繁雄が語る 氷壁・ナイロンザイル事件の真実の追体験

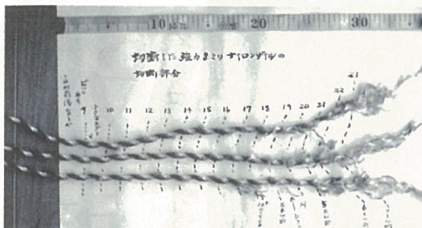
1/17(土)  
13:30～

「ながら山登りの楽しみ方—雲を読む、風を読む、光を読む—」  
三矢保太郎氏  
名古屋大学名誉教授、名古屋産業科学研究所上研究員

# 氷壁を越えて

## ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯

冬の前線高で滑落死した弟のザイルは、本当に安全だったのか。山と人を受し「パツカス」の名で慕われた石岡繁雄の人生は、ナイロンザイル事件によって大きく変わりました。その後二十年間、これ以上山での犠牲者を出さないために、石岡は仲間とともにナイロンザイルの弱点を訴え続けました。彼の執念は事件を乗り越え、登山道具や介護用機器などの開発にまで及びました。安全をめざして闘い続け、小説「氷壁」の題材にもなった石岡繁雄の生涯を、名古屋大学に所蔵・寄託された資料を中心に紹介します。



### 主な展示内容

① パツカスと山 石岡繁雄の生涯 一九一八年クライントの農業修民の子として生まれた石岡は3歳で帰国します。子供の頃から山に憧れ、難しい山を次々挑戦しながら八高、名古屋大学へ進学し、やがて岩壁会を設立します。最愛の妻敏子との登山や屏風岩登攀など、山と妻と愛した石岡の若き日々を紹介します。

② ナイロンザイル事件 一九五五年、石岡の弟若山五郎が北アルプス前線高で滑落死します。石岡や岩壁会による人命と名義回復のための闘いや、事件を題材にした井上靖の新聞連載小説「氷壁」の人氣と相まって、この事件はアカデミズムや企業の責任、倫理を問う大きな社会問題となります。

長年の研余曲折をへて、ついに石岡らの主張が広く社会に認知されるとともに、一九七三年の消費者生活製品安全法の制定などに結実するまで、ナイロンザイル事件の歴史を紹介します。

主な展示品 若山五郎遭難時のナイロンザイル、井上靖直筆の「氷壁」原稿、石岡が遭った事件の経過や実験に関わる記録事件を報じる新聞や雑誌

③ 「氷壁」を越えて 石岡がめざした安全な「ナイロンザイル」事件の真相究明に賭けた石岡の情熱は、安全な山道具、ひいては安全な昇降機器などの開発へと注がれました。自宅裏に16mを超える塔を作り実験を繰り返すことで、滑落防止装置や自動降下装置などを発明します。石岡が後半生を捧げた安全装置開発への取り組みを紹介します。

● 主な展示品 石岡が開発した山道具、昇降機器

名古屋大学博物館  
愛知県名古屋市中区千代田一丁目

アクセス

名古屋地下鉄名城線  
[名古屋大学]下車 2番出口 徒歩2分  
歩道橋は限られていますので、  
公共交通機関をご利用下さい。

名古屋大学博物館

名古屋大学  
NUM  
博物館

<http://www.num.nagoya-u.ac.jp>



## 注

- (1) 大学文書資料室の展示活動については、拙稿「大学アーカイブズの展示活動とその諸問題―名古屋大学における「八高展」を事例に―」（『名古屋大学大学文書資料室紀要』第一七号、二〇〇九年三月）を参照。また、これまで大学文書資料室が開催してきた、まとまった会期を設定した特別展・企画展の詳細については、『名古屋大学博物館第四回特別展記録 名帝大けふ誕生―初代総長洪澤元治とその時代』（『名古屋大学博物館報告』第一八号、二〇〇二年二月）、堀田慎一郎・山口拓史・羽賀祥二・西川輝昭「第一五回名古屋大学博物館企画展記録 伊吹おろしの若者たち―八高創立百年の歴史から―」（『名古屋大学博物館報告』第二四号、二〇〇八年二月）、前掲拙稿「大学アーカイブズの展示活動とその諸問題」、拙稿「企画展『医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念―』（『名古屋大学大学文書資料室紀要』第一八号、二〇一〇年三月）、堀田慎一郎・西川輝昭・羽賀祥二・蛭雄観順・山口拓史「第一九回名古屋大学博物館企画展記録 医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念―」（『名古屋大学博物館報告』第二七号、二〇一一年二月）、拙稿「企画展『響け！ 創統の鐘―名高商から名大経済学部への九〇年―』（『名古屋大学大学文書資料室紀要』第一九号、二〇一一年三月）を参照されたい。
- (2) 二〇〇二年に大学文書資料室が共催した特別展「名帝大けふ誕生―初代総長洪澤元治とその時代」では、確かに名古屋帝国大学時代以外の洪澤元治の生涯に関する展示もあったが、最も多くのスペースを割いたのは、やはり名古屋帝国大学の創立と草創期に関する内容であった（前掲「名古屋大学博物館第四回特別展記録 名帝大けふ誕生―初代総長洪澤元治とその時代」）。
- (3) この抹茶茶碗については、『名大トピックス』第二〇〇号（二〇一〇年一月発行）の「ちよつと名大史」コーナーに、「石岡繁雄の名古屋帝国大学卒業記念品」と題して紹介した（執筆者は本室事務補佐員の田淵宗孝）。
- (4) 博物館では、受贈資料の名称が「石岡繁雄コレクション」と決定しているようであるが、本室受託資料は最終的な名称は未定である（おそらく一般公開時に決定）。本展示記録では、本学に寄贈・寄託された資料全体を石岡繁雄資料と呼んでいることから、とりあえず本室受託資料は「石岡繁雄文書資料」と呼ぶことにした。



(5) 『中日新聞』二〇一二年八月二三日朝刊、『毎日新聞』二〇一二年八月二五夕刊、『読売新聞』二〇一二年八月二八日朝刊、『中日新聞』二〇一二年八月二八日朝刊(愛知県内版など)。そのほか、共同通信もこのニュースを配信した。

(6) ただし、この記事では石岡資料の寄贈先を「名古屋大学図書館」としているが、これは誤報である。

(7) 『氷壁』を超えての意味は、一般の知名度は小説『氷壁』の方が高いものの、展示の本線は現実のナイロンザイル事件であることを示すとともに、石岡繁雄らがのりこえた困難を氷壁に例えたものである。その後、『氷壁』では小説の意味合いだけが強調されすぎる可能性があるので「氷壁」とし、「超えて」については、壁をのりこえるという意味も込めるのなら「越えて」の方がよいだろうということになった。

(8) 株式会社あるむは、本企画展の基礎文献となった石岡繁雄・相田武男『石岡繁雄が語る 氷壁・ナイロンザイル事件の真実』(二〇〇七年)や石岡繁雄『ザイルに導かれて―登山家石岡繁雄の半生』(二〇〇五年)、石岡繁雄『屏風岩登攀記』(復刻版、二〇〇七年)を刊行した出版社である。

(9) それらの展示パネルは、注(1)に挙げた展示記録を参照。

(10) 展示会場の照明の関係で、展示ケース内の様子ではなく、別の場所で後日撮影したものも多い。

(11) もっとも、石岡繁雄文書資料の中に目玉となるものが全くないというのは、筆者の認識不足であった。事件の核心部分が小説『氷壁』に反映されていないことに不満を持った石岡繁雄が、朝日新聞に『氷壁』を連載中の井上靖に対して、このようなストーリーにしてほしいと提案する大部の書簡の草稿は、当初は筆者が展示候補から外していたが、マスコミが取材の中で強い関心を示したことをきっかけに、会期直前になって展示することになった。

(12) 実は、大町山岳博物館の常設展示物については、本学より先に井上靖文学館が展示のための借用を依頼していた。本来なら優先権は井上靖文学館にあったが、同館は展示期間を変更するなどして、本企画展でも展示できるよう深甚のご配慮をいただいた。これについてもあらためて謝意を表すものである。

(13) 相田武男氏は元朝日新聞記者。石岡繁雄と前掲『氷壁・ナイロンザイル事件の真実』を共著した。本企画展には、展示資料もご貸与いただいた。

(14) 『中日新聞』二〇一三年一月六日朝刊、一月二七日夕刊、『毎日新聞』二〇一三年一月五日夕刊、『朝日新聞』二〇一三年一月一九日夕刊など。これらの記事の一部は、本記録展示にも掲載した。

(15) NHK「ニュース845東海」(二〇一三年一月五日)、NHK「ほっとイブニング」(同年一月一四日)、NHK「NHKニュース」(同年一月二二日、特別講演会に関する報道)、名古屋テレビ(メ〜テレ)「ANNニュース」(同年一月九日)、CBCラジオ「土曜ワイド 広瀬隆のラジオでいこう!」(同年一月一六日、二三日)。

(ほった・しんいちろう 大学文書資料室)



